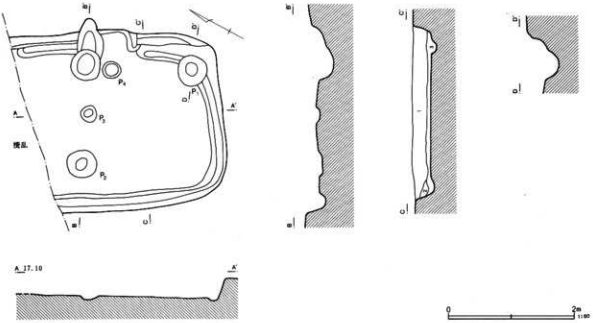
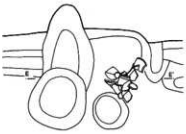
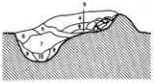
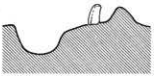
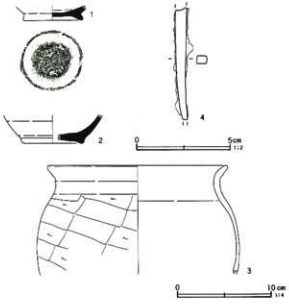
第348図　第107号住居跡・カマド・出土遺物










ＳＪ１０７
1　黒褐色土　　ローム粒子少量含む。
2　暗黄褐色土　ローム粒子多量含む。
3　黒褐色土　　ロームブロック少量含む。
カマド
4　黒褐色土　　ローム粒子、焼土粒子微量含む。
5　暗赤褐色土　焼土粒子少量含む。
6　暗赤褐色土　焼土粒子、焼土ブロック少量含む。
7　赤褐色土　　焼土粒子、焼土ブロック多量含む。
8　暗赤褐色土　焼土粒子多量、焼土ブロック少量含む。
9　黄褐色土　　ロームブロック多量含む。
10　暗褐色土　　ローム粒子、焼土粒子微量含む。

第107号住居跡出土遺物観察表（第348図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 高台付埦 | | | 6.4 | KL | C | 淡赤褐色 | 80 | 底部に漆状の黒色物付着 |
| 2 | 高台付埦 | | | (6.8) | KL | B | 暗灰色 | 40 | |
| 3 | 甕 | (19.2) | | | BKL | A | 淡茶褐色 | 50 | 内面風化 |
| 4 | 鉄製品 | 長さ(5.8)×幅0.5×厚さ0.4cm、重量5.19g | | | | | | | 角棒状 |

た。また、カマドの周囲と中央部には、灰白色粘土がブロック状に集中して堆積していた。

貯蔵穴、柱穴、壁溝などの付属施設は検出されなかった。また、遺物も出土しなかった。

**第107号住居跡**（第348図）

調査区の中央、北寄りのX・Y－11グリッドに位置し、北辺を攪乱によって壊されている。平面形態は南北に長い長方形で、規模は残存する長辺3.17m、短辺2.70m、深さ0.30mである。主軸方向はN－65°－Eである。

住居跡の覆土はローム粒子を少量含む黒褐色土で、覆土中には殆ど焼土や炭化物はみられなかった。

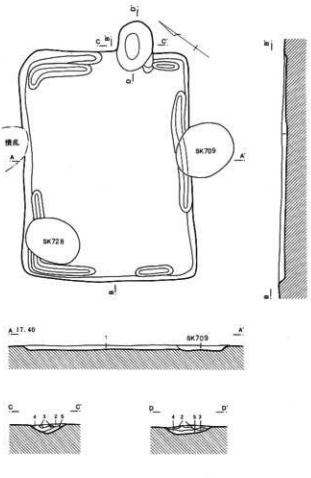
カマドは東辺中央に1基付設されていた。カマド周辺は染み状に攪乱が入り、遺存状態は良くなかった。カマドは燃焼面とみられる掘り込みが北側に寄っており、右袖とみられる高まりが約50cm離れた位置に確認された。当初はカマドの作り替えを考えたが、掘りこみと袖状の高まりとの間の覆土下層には多量の焼土が伴うものの、底面では被熱は観察されなかった。また、その覆土中からは土製の支脚が立った状態で、土師器甕が潰れた状態で出土しているが、状況からは二次的に置かれた可能性が高く、この部分がカマドであった可能性は低いと考えられる。

床面は部分的に凹凸がみられるが、ほぼ平坦で、特に貼り床などは検出されなかった。ピットは4基検出されたが、配置は不規則で柱穴であるかは断定できなかった。また、壁溝はカマド付近を除いて全周する。

**出土遺物**（第348図）

出土遺物には、須恵器坏、高台付埦、土師器甕、釘、土製支脚がある。遺物は主にカマド周辺から出土している。このうち土製支脚については、危弱であるため、

第349図　第108号住居跡




SJ108
1　暗褐色土　ローム粒子多量、焼土粒子、炭化粒子、ロームブロック微量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子少量含む。粘性あり。
3　橙褐色土　焼土ブロック多量、褐色ブロック微量含む。
4　暗黄褐色土　ローム粒子多量、暗褐色土ブロック、焼土粒子、炭化粒子少量含む。粘性あり。
5　黄褐色土　ローム粒子多量、焼土粒子、炭化粒子微量含む。粘性あり。緻密。

図示できなかった。

1・2は須恵器高台付椀の破片で、木野産である。3は土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は短く、胴部に丸味がある。4は鉄製の釘で、基部と先端を欠く。

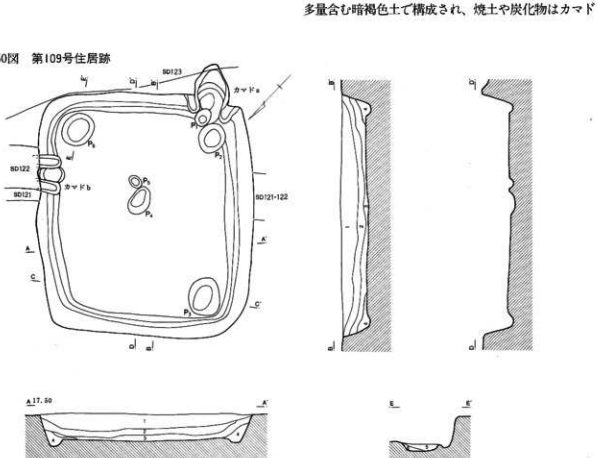
住居跡の年代は、出土遺物から10世紀前半と考えられる。

**第108号住居跡（第349図）**

調査区の中央、北側のY－10グリッドに位置している。平面形態は東西方向に長い長方形で、規模は長辺3.64m、短辺2.63m、深さ0.06mである。主軸方向はN－55°－Eである。

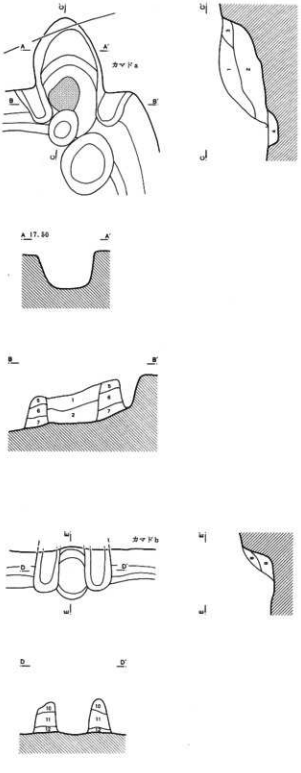
住居跡は一部を後世の土壙SK709・728や大小の攪乱と重複し、カマド付近は床面が露出するなど遺構確認面からの掘り込みは浅かった。覆土はローム粒子を多量含む暗褐色土で構成され、焼土や炭化物はカマド

第350図　第109号住居跡




SJ109
1　黒褐色土　ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量含む。微密。
2　黒色土　ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子、ローム ブロック微量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量、ローム ブロック少量含む。
4　暗黄褐色土　ローム粒子多量、焼土粒子、炭化粒子、ローム ブロック微量含む。
5　黒褐色土　ローム粒子少量、炭化粒子微量含む。
6　暗黄褐色土　焼土粒子微量、褐色ブロック少量、ローム ブロック多量含む。

第351図　第109号住居跡カマド




ＳＪ１０９カマドａ・ｂ

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 灰褐色土 | 焼土粒子少量、褐色粒子微量含む。 |
| 2 | 暗赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量、炭化物少量含む。 |
| 3 | 暗黄褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子微量含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | 焼土粒子、黒色ブロック少量、ロームブロック多量含む。 |
| 5 | 灰褐色土 | ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量、灰褐色粘土ブロック多量含む。 |
| 6 | 暗灰褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量、褐色ブロック少量、粘土ブロック多量含む。粘性あり。 |
| 7 | 暗褐色土 | ローム粒子少量、焼土粒子多量、ロームブロック微量含む。 |
| 8 | 灰褐色土 | 焼土粒子少量、灰褐色粘土粒子多量含む。 |
| 9 | 暗赤褐色土 | ローム粒子少量、焼土粒子、焼土ブロック多量含む。 |
| 10 | 暗褐色土 | 白色粘土粒子少量、ローム粒子少量、ロームブロック微量含む。 |
| 11 | 褐色土 | 白色粘土粒子、焼土粒子多量、白色粘土ブロック少量含む。粘性あり。 |
| 12 | 暗黄褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子微量含む。 |

周辺を除いては殆ど確認できなかった。

カマドは北東辺やや東寄りに１基付設されていた。既に袖はなく、燃焼面の掘形が確認された。覆土は焼土ブロックが主体で、炭化物や粘土などは観察されなかった。燃焼面の底面はレンズ状に窪んでおり、ほぼ全面にわたって被熱で赤変していた。

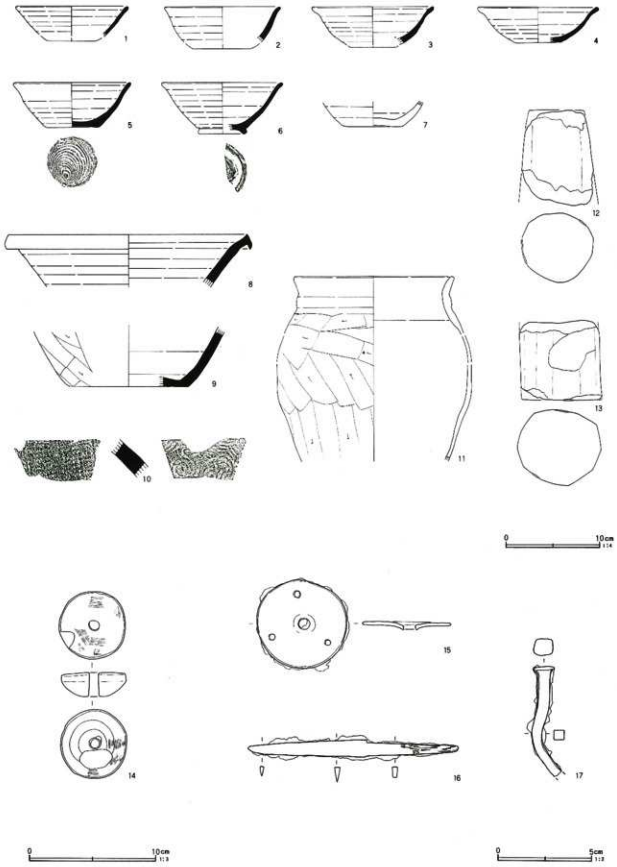
床面は平坦で、やや西側に傾斜している。壁溝はカマドを除く各辺で確認されたが、全周せず途中で途切れている。また、貯蔵穴、柱穴などの付属施設は検出されなかった。遺物は出土しなかった。

**第109号住居跡（第350・351図）**

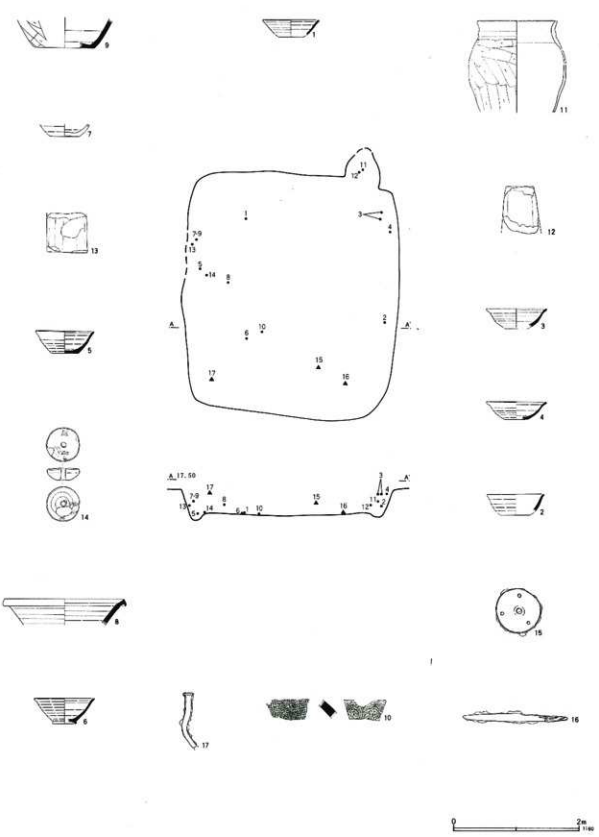
調査区の中央北側、Ｘ－９・10グリッドに位置し、中央部を幅約１ｍにわたって東西方向に後世の溝跡ＳＤ121・122と重複している。カマドは２基検出され、遺存状態から東辺に付設されたカマドａが新しいと判断した。平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺3.85ｍ、短辺3.23ｍ、深さ0.44ｍである。主軸方向はＮ－148°－Ｓである。

住居跡の覆土は、ローム粒子を少量含む黒褐色土で構成される。焼土や炭化物はカマド付近に集中し、特に溝跡と重複する地点以外には大きな土層変化は認められなかった。床面は平坦であるが、中央付近が僅かに窪んでいる。

第352図　第109号住居跡出土遺物



第353図　第109号住居跡遺物分布図



カマドは東辺と北辺に各1基付設されていた。カマドaは東辺の南寄り、隅付近に付設され、壁を約50cm掘り込んで構築されている。袖は左右とも一部残存し、灰褐色粘土とロームブロックを主体に構築されていた。燃焼面は床面と同一レヴェルで、側壁にかけては被熱で赤く変色していた。

カマドbは北辺、やや東寄りに付設されていた。煙道をSD121・122との重複によって壊されているが、溝跡があまり深く掘り込まれていないことから、カマドbの煙道は短く、燃焼面からは急角度で立ち上がって構築されていたものと判断した。袖は左右とも一部残存していたが、カマドa構築時に袖や燃焼面の大半を壊し、壁溝を通したものと考えられる。

壁溝はカマドを除いて全周するが、カマド付近は構築時に掘り直しているため、やや深くなっている。ピットは6基検出され、P6は位置や大きさなどから貯蔵穴と考えられる。

**出土遺物**（第352図）

出土遺物には須恵器坏、高台付埦、甕、酸化焔焼成坏、土師器甕、紡錘車、支脚、刀子、釘がある。遺物はカマド周辺及び覆土中から出土しているが、図示できなかった遺物も含めて鉄製品が数多く出土した。

第109号住居跡出土遺物観察表（第352図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (12.0) | | | K | B | 淡赤褐色 | 25 | |
| 2 | 坏 | 12.5 | | | BK | B | 黄灰色 | 20 | |
| 3 | 坏 | (13.0) | | | BK | A | 灰色 | 20 | |
| 4 | 坏 | 13.0 | 3.7 | (4.8) | EKL | C | 淡赤褐色 | 15 | |
| 5 | 坏 | (12.5) | 4.7 | 5.5 | BKL | A | 暗青灰色 | 60 | |
| 6 | 高台付埦 | 13.0 | 5.4 | (5.2) | EKL | B | 暗灰色 | 35 | |
| 7 | 坏 | | | 6.5 | HK | C | 淡茶褐色 | 35 | 酸化焔焼成 |
| 8 | 甕 | (25.6) | | | BK | C | 淡暗褐色 | 10 | |
| 9 | 広口壺 | | | (13.0) | KL | A | 暗灰色 | 20 | |
| 10 | 甕 | | | | BGK | A | 青灰色 | 10 | 自然釉付着 |
| 11 | 甕 | 17.2 | | | BKL | A | 橙褐色 | 60 | 内面風化 |
| 12 | 支脚 | 長さ(10.0)×幅7.6×厚さ7.3cm | | | | | | | |
| 13 | 支脚 | 長さ(8.5)×幅9.0×厚さ8.0cm | | | | | | | |
| 14 | 紡錘車 | 長径5.5×短径5.2×孔径0.7×厚さ1.9cm、重量57.3g | | | | | | | |
| 15 | 紡錘車 | 長径4.75×短径4.6×孔径0.6×厚さ0.2cm、重量17.7g | | | | | | | 車部　軸孔以外に穿孔3ヶ所あり　鉄製品 |
| 16 | 刀子 | 長さ(11.1)×身幅0.9×棟幅0.3cm、重量9.31g | | | | | | | |
| 17 | 釘 | 長さ(5.8)×幅0.55×厚さ0.5cm、重量9.63g | | | | | | | 脚部欠 |

1～5は須恵器坏で、底形が小さく、口縁部先端の外反が弱いものである。5は深身である。6は須恵器高台付埦で、全体に小振りである。7は酸化焔焼成の坏で、全体に厚手である。ロクロを使用し、底部は回転糸切りである。8・10は破片であるが、須恵器甕、9は広口壺とみられる。11は土師器甕で、厚手の「コ」の字口縁である。12・13は土製の支脚の破片で、カマドb付近から出土した。14は石製品、15～17は鉄製品である。14・15は紡錘車である。15は表面に三箇所の小突起があり、中心は片側に反っている。16は刀子で、基部に木樋が残る。17は断面が方形の釘破片である。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀末から10世紀初めと考えられる。

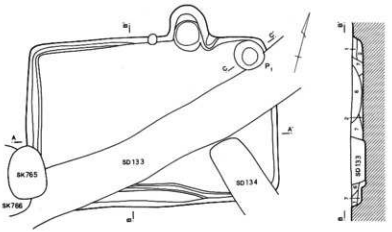
**第110号住居跡**（第354図）

調査区の北側、AB・AC－13グリッドに位置し、後世の溝跡SD133や土壙SK134・765などと重複している。平面形態は長方形で、規模は長辺3.97m、短辺2.65m、深さ0.18mである。主軸方向はN－12°－Wである。

住居跡の覆土は、焼土粒子や炭化物を少量含む暗褐色土で構成されるが、土層は部分的に乱れがあり、後世の掘削などが及んでいる可能性も考えられる。

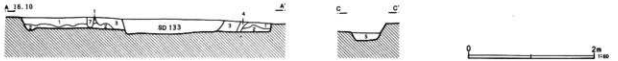
カマドは北辺中央やや東寄りに1基付設され、壁を約50cm掘り込んで構築されていた。袖は殆ど残存していなかったが、袖の構築材の一部とみられる白色粘土が部分的に確認された。

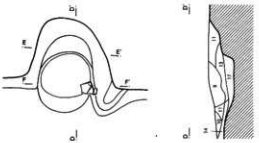
第354図　第110号住居跡・カマド




SJ110

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗褐色土 | 炭化粒子、焼土粒子、ローム粒子少量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | 炭化粒子、焼土粒子、ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。粘性あり。 |
| 6 | 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 7 | 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒子、炭色ブロック少量含む。 |



カマド

| | | |
|---|---|---|
| 9 | 暗褐色土 | 赤色粒子、白色粘土粒子少量含む。 |
| 10 | 暗褐色土 | 赤色粒子少量含む。 |
| 11 | 暗褐色土 | 赤色粒子ローム粒子少量含む。 |
| 12 | 暗赤褐色土 | 焼土ブロック多量含む。粘性あり。 |
| 13 | 暗黄褐色土 | ローム粒子多量、赤色粒子微量、白色粘土ブロック少量含む。粘性あり。 |
| 14 | 暗褐色土 | 赤色粒子、ローム粒子微量含む。 |
| 15 | 灰褐色土 | 赤色粒子、炭化物少量含む。 |
| 16 | 灰褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 17 | 褐色土 | ローム粒子多量、炭化物、赤色粒子少量含む。粘性あり。 |

第355図　第110号住居跡出土遺物

第110号住居跡出土遺物観察表（第355図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 13.0 | 3.3 | 5.0 | BKL | C | 淡青灰色 | 30 | |
| 2 | 坏 | (14.0) | 3.2 | 6.2 | BKL | A | 赤褐色 | 50 | |
| 3 | 高台付瓶 | (13.6) | 5.4 | (6.6) | BDK | B | 淡青灰色 | 30 | |

燃焼面の底面は床面から5cm程掘り込まれ、摺り鉢状になっていた。カマド内では焼土が多く観察されたが、底面付近では少なく、被熱も殆ど確認できなかった。

貯蔵穴はカマドの右側隅で検出された。直径50cm弱、深さ15cmの円形で、覆土はロームブロックを主体に構成されている。また、壁溝は東辺を除いて検出されたが、南辺では途中から壁際に沿らないで大きく内側に入り込んでいた。

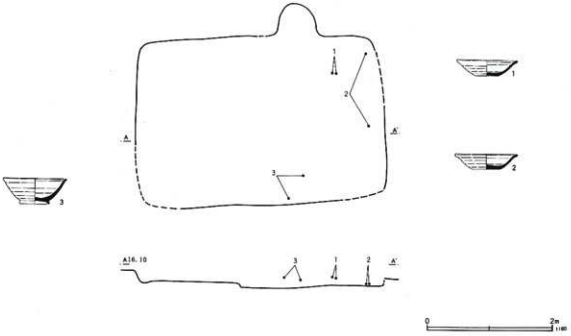
**出土遺物**（第355図）

出土遺物は須恵器坏と高台付椀である。遺物は覆土の層位が変化し、少なかった。図示した須恵器類は覆土及び床面から出土している。この他にカマド内から土師器甕胴部の破片が出土している。

1・2は須恵器坏で、体部が直線的にひらくのに対して、口縁部先端は大きく外反する。底部は径が異なるが回転糸切りで、ともに南比企産である。3は須恵器高台付椀で、やや小振りである。体部のロクロ痕跡は明瞭である。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半から末頃と考えられる。

第356図　第110号住居跡遺物分布図




**第111号住居跡**（第357図）

調査区の北側、Z－11グリッドに位置し、後世の土壙SK803や攪乱との重複によって、住居跡の南東側は大半が原形を留めていない。平面形態は東西方向に長い長方形で、規模は長辺3.74m、短辺3.02m、深さ0.15mである。主軸方向はN－50°－Wである。

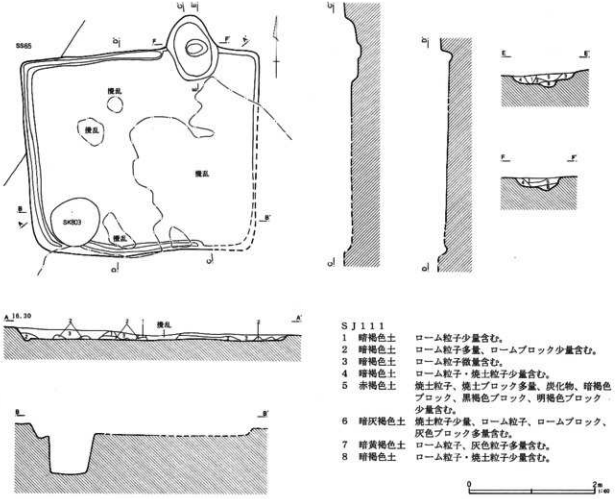
住居跡の覆土は、ローム粒子を少量含む暗褐色土で構成され、部分的にローム粒子がブロック状にかたまる地点が数箇所みられた。床面は平坦である。

カマドは壁を約40cm掘り込み、北辺東寄りに1基付設されていた。遺存状態が悪く、掘形だけが検出された。カマド内の覆土は、主に焼土や炭化物は上層に集中し、下層では殆どみられなかった。また、燃焼面周辺では被熱の痕跡は確認できなかった。

壁溝は床面の残る西側半分では、カマドを除いて全周していたが、カマドの東側では攪乱の影響を受けていない地点でも壁溝がない箇所があることから、東辺には壁溝が設けられていない可能性が考えられる。

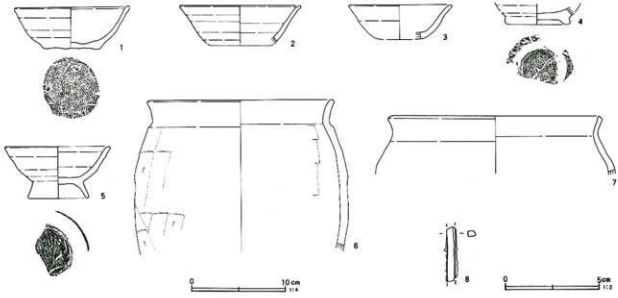
また、貯蔵穴や柱穴などの付属施設は検出されなかった。

第357図　第111号住居跡




SJ111
1　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子微量含む。
4　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量含む。
5　赤褐色土　焼土粒子、焼土ブロック多量、炭化物、暗褐色ブロック、黒褐色ブロック、明褐色ブロック少量含む。
6　暗灰褐色土　焼土粒子少量、ローム粒子、ロームブロック、灰色ブロック多量含む。
7　暗黄褐色土　ローム粒子、灰色粒子多量含む。
8　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量含む。

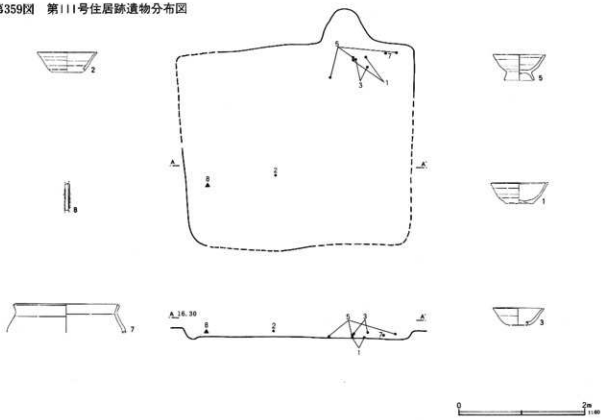
第358図　第111号住居跡出土遺物



第111号住居跡出土遺物観察表（第358図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 12.3 | 4.4 | 6.0 | BEK | A | 暗赤褐色 | 80 | 酸化焔焼成 |
| 2 | 坏 | (13.0) | | | GK | C | 淡橙褐色 | 15 | 風化目立つ　酸化焔焼成 |
| 3 | 坏 | (11.0) | 3.6 | (5.2) | BHK | A | 淡赤褐色 | 30 | 酸化焔焼成 |
| 4 | 高台付埦 | | | 6.9 | K | C | 灰褐色 | 60 | 酸化焔焼成 |
| 5 | 高台付埦 | (11.2) | 5.4 | (6.5) | HKL | A | 暗赤褐色 | 50 | 酸化焔焼成 |
| 6 | 甕 | (20.0) | | | HKL | A | 暗赤褐色 | 20 | |
| 7 | 甕 | 23.0 | | | BK | A | 淡赤褐色 | 10 | |
| 8 | 鉄製品 | 長さ(2.3)×幅0.45×厚さ0.25cm、重量1.51g | | | | | | | 角棒状品 |

第359図　第111号住居跡遺物分布図




**出土遺物**（第358図）

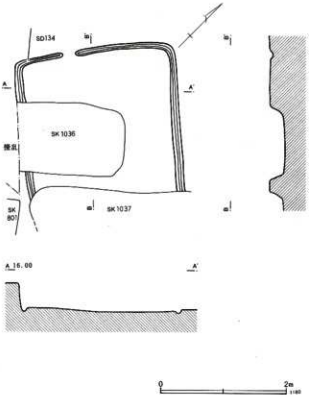
出土遺物には酸化焔焼成坏、高台付埦、土師器甕がある。遺物は、住居跡が確認面からの掘り込みが浅かったこともあり、殆どが床面付近から出土している。

1～3は酸化焔焼成の坏で、1・2は口径約12cm、底径5～6cm、器高約4cm、3はやや小振りで、口縁部の外反が1・2より大きく、胎土に雲母を多く含んでいる。底部は1のみ残っているが、回転糸切りの可能性が考えられる。4は酸化焔焼成の高台付埦または須恵器高台付埦の焼成不良品と思われるものである。形態的には須恵器に近いが、須恵器のような仕上げではなく、土師器に類している。5は酸化焔焼成の高台付埦で、足高高台になっている。胎土には3と同様、雲母が多量に含まれる。また、3と5はロクロの痕跡が1・2などに比べて弱く、ナデが多用されている。

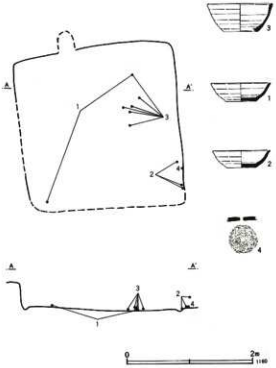
6・7は土師器甕である。6は口縁部が短く、土釜とも称される厚手の土器である。胴部は縦方向のヘラケズリであるが、全体につくりが雑である。胎土には多量に雲母が含まれている。7は口縁部が短く、胴部上半部に最大径をもつ甕である。風化が著しく、調整などが不明瞭である。

住居跡の年代は、出土遺物に所謂須恵器が含まれず、酸化焔焼成の土器群が主体であることから10世紀中頃から後半頃と考えられる。

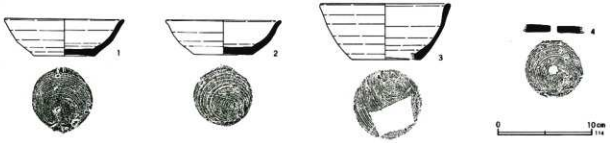
第360図　第112号住居跡




第361図　第112号住居跡遺物分布図




第362図　第112号住居跡出土遺物




**第112号住居跡**（第360図）

調査区の北側、ＡＢ－14グリッドに位置し、後世の土壙ＳＫ1036・1037などと重複している。また、住居跡の付近は攪乱が多く入り込んでいるため、住居跡の壁が殆ど確認できなかった。平面形態は長方形と考えられ、規模は残存する部分で、長辺2.56m、短辺2.38m、深さ0.48mである。

覆土は黒褐色土を基本に構成されているが、攪乱が多く入るため、細かい観察ができなかった。

床面は平坦で、特に貼り床は検出されなかった。壁溝は西辺で部分的に切れるが、土壙と重複する東側を除いて全周するものと考えられる。

カマドは検出されなかったが、この集落内の住居跡に多い東辺、北辺のカマドの存在を考慮すると、ＳＫ1037付近に付設されていたことが予想される。また、貯蔵穴、柱穴などの付属施設は検出されなかった。

**出土遺物**（第362図）

出土遺物には須恵器坏、塊、紡錘車がある。住居跡は遺存状態が悪かったため、遺構が深かったにもかかわらず、遺物の出土量は少なかった。図示した遺物はいずれも床面から出土したものである。

1・2は須恵器坏で、口径約12、5cm、底径約6、2cm、

第112号住居跡出土遺物観察表（第362図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 12.7 | 3.9 | 6.4 | CK | A | 紫褐色 | 60 | |
| 2 | 坏 | 12.4 | 3.6 | 6.2 | CKL | A | 暗青灰色 | 65 | |
| 3 | 椀 | 14.0 | 5.8 | 7.4 | BCKL | B | 灰色 | 50 | |
| 4 | 紡錘車 | 長径6.0×短径5.6cm | | | K | A | 暗青灰色 | 100 | 孔径0.75×厚さ0.7cm、重量38.3g　坏の底部転用 |

器高約3、5cmと殆ど大きさが同じ土器である。やや厚手で、口縁部先端で外反する。底部は回転糸切りである。3は口縁部と底部周辺が厚手になる須恵器椀である。口径14cm弱、底径約7cm、器高6cm弱と小振りで、底部は回転糸切りである。内外面ともロクロの痕跡は明瞭である。4は須恵器坏の底部を転用した紡錘車である。底部の中心部に直径約8mmの孔を穿っているが、周囲は特に調整などは行なっていない。1～4はいずれも南比企産である。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

**第113・114号住居跡**（第363図）

調査区の北側、AA－15、Z－15グリッドに位置している。2軒の住居跡は、SJ114がSJ113の上に構築されて検出されたが、後世の土壌などとの重複によってともに遺構全体の遺存状態は良くなかった。

平面形態はともに長方形である。規模はSJ113の遺存状態が悪いため、不明瞭な点を残すが長辺は約2.90m、短辺2.30mと推定され、深さは0.18mである。SJ114は長辺2.70m、短辺2.37m、深さ0.20mである。主軸方向はSJ113がN－17°－W、SJ114がN－20°－Wである。

SJ113は他の遺構との重複によって大半が原形を留めておらず、西辺とカマドの燃焼面だけが検出された。住居跡の覆土は、ローム粒子、焼土粒子を少量含む暗褐色土で構成され、SJ114と類似しているが、下層はSJ114に比べてロームブロックの量が多い。

カマドは北辺中央で1基、掘形が検出された。掘形はピットが2基連続するような形態で、覆土も手前側と奥では異なっており、攪乱や土壌との重複によって多少変化している可能性も考えられる。

壁溝は残存する西辺に沿って、南辺の一部まで検出されたが、途中で止まっており、連続するような傾向はみられなかった。また、床面は凹凸が著しく、貯蔵穴や柱穴などの付属施設も検出されなかった。

SJ114はSJ113と同規模で、主軸をやや東側に振って構築され、カマドは北東辺と南西辺中央に各1基が付設されていた。2基とも遺存状態が悪く、殆ど掘形だけが検出された。先後関係はカマドaが新しく、カマドbが古い。カマドaは壁を約1m、燃焼面は床面から約5cm掘り込んで構築され、奥壁で垂直に近い角度で立ち上がっている。底面は平坦で、部分的に被熱によって赤変していた。

カマドbはカマドaに比べて燃焼面の掘り込みは浅く、床面のレヴェルに近い。底面は平坦で、奥壁付近はやや垂直気味に立ち上がっている。覆土中には焼土や炭化物はみられたが、底面では被熱は観察されなかった。

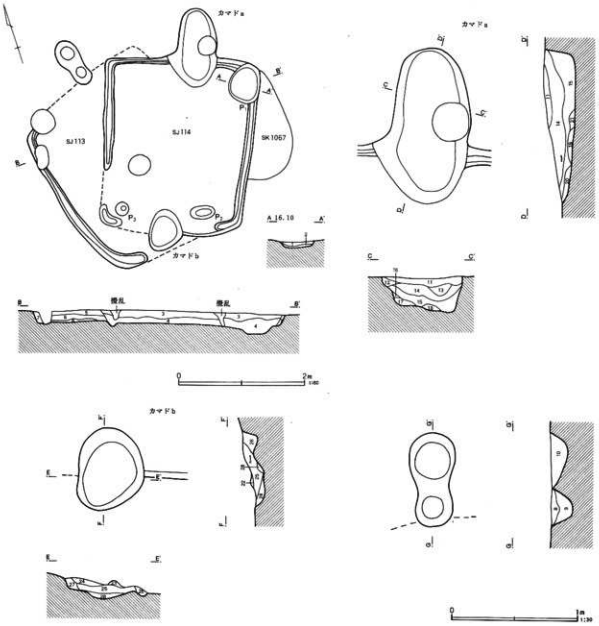
貯蔵穴はカマドaの右側、北東隅で検出された。楕円形で、壁溝を掘り込んで構築されている。また、他にピットは2基検出されたが、いずれも掘り込みが浅く、柱穴とは判断できなかった。

**出土遺物**（第364図）

出土遺物には須恵器坏、高台付埦、灰釉陶器埦、土師器台付甕、甕、刀子がある。遺物の多くはSJ114から出土したものであるが、一部は帰属の判断に苦慮する位置から出土したものもあり、便宜上、2軒の住居跡からの出土遺物として取り扱った。

1・2は須恵器坏で、口縁部先端が僅かに外反し、底部は回転糸切りである。3は須恵器高台付埦で、高台が低く、体部のロクロ痕跡を強く残す。4は灰釉埦で、釉薬は漬けかけである。5は土師器台付甕の口縁部から胴部にかけての破片である。内面は刷毛状工具

第363図　第113・114号住居跡・カマド

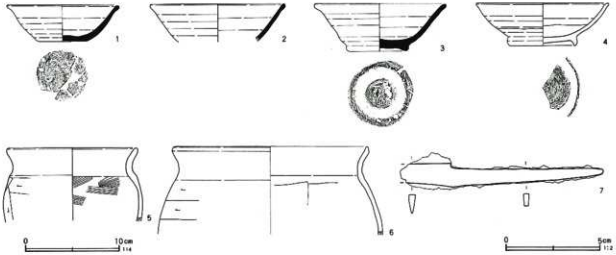



ＳＪ１１３・１１４
1　黒褐色土　　ローム粒子少量含む。
2　暗褐色土　　ローム粒子微量含む。
3　暗褐色土　　ローム粒子、焼土色粒子微量含む。
4　暗褐色土　　ロームブロック微量含む。
5　暗褐色土　　ローム粒子微量含む。
6　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
7　暗褐色土　　ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。
8　暗褐色土　　ロームブロック少量含む。
ＳＪ１１３カマド
8　暗褐色土　　焼土粒子少量含む。
9　褐色土　　焼土粒子微量含む。
10　暗褐色土　　焼土粒子、白色粘土粒子、炭化粒子微量含む。
ＳＪ１１４カマドa
11　暗褐色土　　白色粘土粒子少量含む。
12　暗褐色土　　ローム粒子微量含む。
13　黒褐色土　　ローム粒子少量含む。
14　暗褐色土　　白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化粒子多量含む。
15　暗褐色土　　白色粒子、焼土粒子少量含む。
16　暗褐色土　　ローム粒子多量含む。
17　暗褐色土　　焼土粒子多量含む。粘性あり。
18　暗褐色土　　焼土粒子少量、ロームブロック多量含む。
19　暗褐色土　　焼土粒子微量、ロームブロック多量含む。
20　暗褐色土　　炭化粒子少量、ロームブロック多量含む。
21　黒褐色土　　白色粘土粒子多量含む。
ＳＪ１１４カマドb
22　暗褐色土　　焼土粒子多量含む。
23　暗褐色土　　焼土粒子多量、白色粘土粒子、少量含む。
24　暗褐色土　　炭化粒子、焼土ブロック、白色粘土粒子多量含む。
25　暗灰褐色土　焼土粒子、炭化粒子少量含む。
26　暗褐色土　　ロームブロック多量含む。
27　暗褐色土　　ロームブロック多量、焼土ブロック少量含む。
28　暗褐色土　　ロームブロック少量含む。

で調整されている。6は土師器甕の口縁部から胴部上半の破片である。口縁部が短く、胴部上半に最大径がある。7は刀子の破片で、刃先の大半を欠く。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀末から10世紀初め頃と考えられる。

第364図　第113・114号住居跡出土遺物




第113・114号住居跡出土遺物観察表（第364図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 12.0 | 3.8 | 5.2 | BCK | C | 黄灰色 | 85 | |
| 2 | 坏 | (14.6) | | | BKL | | | 25 | |
| 3 | 高台付椀 | 14.0 | 5.0 | 6.6 | EKL | A | 淡黒褐色 | 80 | 口縁部から体部ロクロナデ　内面黒色処理？ |
| 4 | 椀 | (14.2) | (4.5) | (7.2) | K | A | 淡黄灰色 | 20 | 灰釉 |
| 5 | 台付甕 | (14.0) | | | EKL | A | 暗褐色 | 15 | |
| 6 | 甕 | (21.0) | | | GK | A | 淡暗赤褐色 | 10 | |
| 7 | 刀子 | 長さ(10.5)×身幅1.0×棟幅0.35cm、重量13.92 g | | | | | | | 刃部大半欠　茎部完存 |

**第115・116号住居跡（第365・366図）**

調査区の北側、AA－15グリッドに位置し、SJ116は一部が調査区外にかかり、2軒の住居跡はSJ115の上にSJ116が構築されていた。カマド付近は攪乱等と重複し、遺存状態は良くなかった。平面形態はともに長方形で、規模はSJ115が長辺2.70m（推定）、短辺2.38m、深さ0.10m、SJ116が長辺4.22m、短辺3.52m、深さ0.12mである。主軸方向はSJ115がN－80°－E、SJ116がN－11°－Wである。

SJ115の覆土は、ローム粒子を少量含む暗褐色土で構成され、床面は平坦である。

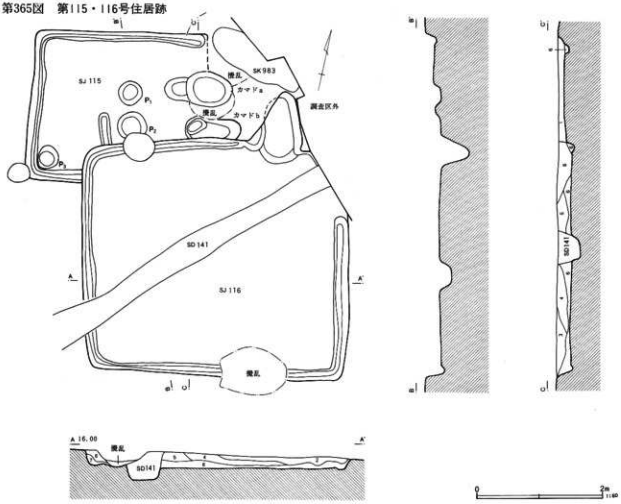
カマドは、短辺の東辺中央に2基付設されていた。攪乱などによって壊されていたが、カマドaの燃焼面中央からは土師器台付甕が出土した。カマドの燃焼面底面はaは平坦で、bはピット状で凹凸が著しく、ともに底面付近の被熱の痕跡は弱かった。また、カマドの先後関係は遺存状態が悪く、判断ができなかった。

ピットは3基検出されたが、貯蔵穴や柱穴に該当するものは見当らなかった。壁溝はカマドのある東辺が攪乱などで不明であるが、カマドを除いて全周する可能性が考えられる。

SJ116はSJ115よりやや深く掘り込まれ、長辺を斜めに入る後世の溝跡SD141と重複している。覆土は焼土粒子やロームブロックを多量含む暗褐色土で構成されるが、カマド付近を除いても焼土などの集中地点に偏りがみられるため、人為的な堆積があった可能性が考えられる。

カマドは北辺やや東寄りに1基付設されていた。袖

第365図　第115・116号住居跡




ＳＪ１１５・１１６
1　暗褐色土　ローム粒子、炭化粒子、ロームブロック少量含む。
2　暗灰褐色土　白色粒子、ローム粒子、黒褐色ブロック、灰褐色ブロック少量含む。粘性あり。
3　暗褐色土　焼土粒子、ローム粒子、ロームブロック多量含む。
4　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
5　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
6　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、灰褐色ブロック少量含む。
7　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
8　暗褐色土　ローム粒子少量、焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子多量含む。

や煙道付近は攪乱によって壊され、殆ど掘形に近い状態で、底面は僅かに被熱で赤変していた。

床面は平坦で、壁溝はカマドと調査区外にかかる北東隅を除いて全周していた。貯蔵穴などの付属施設は検出されなかった。

**出土遺物**（第367図）

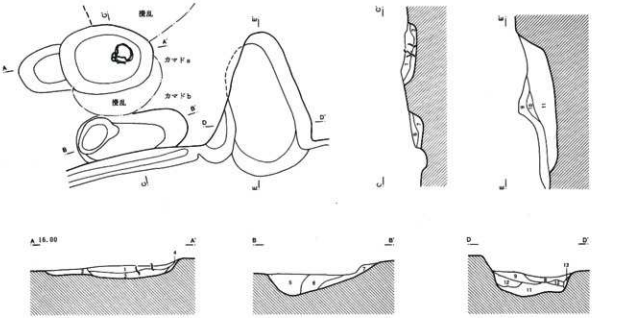
遺物の大半はＳＪ115の２基のカマド周辺から出土し、ＳＪ116からの出土量は少なかった。

ＳＪ115の出土遺物には、須恵器坏、土師器台付甕、小型甕、砥石、釘がある。１～４は須恵器坏で、口径約13cm（２は12.6cm）、底径が５cm余りで、口径に対する底径の比率が小さい。５は土師器台付甕で、脚部を欠く。６は「コ」の字口縁の土師器小型甕である。７は砥石、８は折れ釘の破片である。

ＳＪ116の出土遺物には、須恵器坏、高台付埦、土師器坏、甕、砥石がある。１～４は須恵器坏で、ＳＪ115に比べてさらに底径が小さく、形態や法量にも多様化がみられる。５は須恵器高台付埦または長頸瓶の可能性も考えられる。６は土師器坏の口縁部、７は土師器甕の底部付近の破片である。８は砥石の破片で、先端付近を欠く。

住居跡の年代は出土遺物から９世紀後半から末頃と考えられる。

第366図　第115・116号住居跡カマド



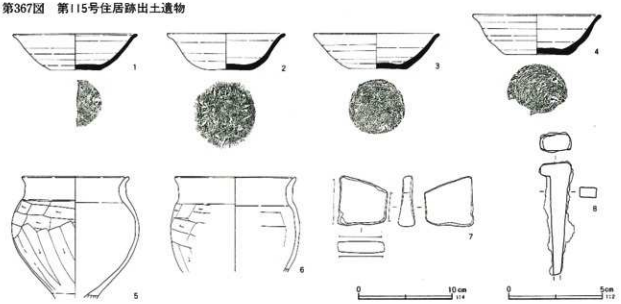

ＳＪ１１５カマド

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子多量、ローム粒子、ローム ブロック、灰色粘土ブロック少量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子多量、ローム粒子、灰色粘土 ブロック少量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量、灰色ブロック 少量含む。粘性あり。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。粘性あり。 |
| 5 | 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子多量、ローム粒子、ローム ブロック少量含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、灰色粒子少量 含む。 |
| 7 | 灰色土 | ローム粒子、灰色粒子多量含む。粘性あり。 |

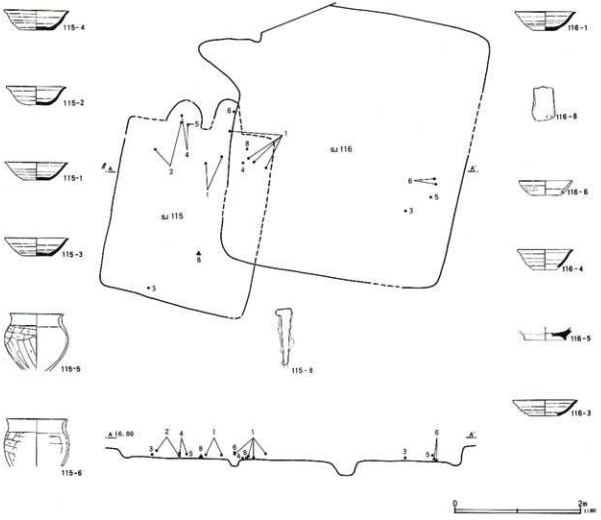
ＳＪ１１６カマド

| | | |
|---|---|---|
| 8 | 灰色土 | 灰色粘土粒子多量含む。粘性あり。 |
| 9 | 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子、灰色粘土粒子多量含む。 |
| 10 | 赤褐色土 | 焼土ブロック多量含む。 |
| 11 | 暗赤褐色土 | 炭化粒子、灰色粘土粒子少量、焼土粒子、焼土 ブロック多量含む。 |
| 12 | 灰褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子少量、灰色粘土粒子多量含む。 粘性あり。 |
| 13 | 灰色土 | 灰色粘土粒子多量含む。粘性あり。 |

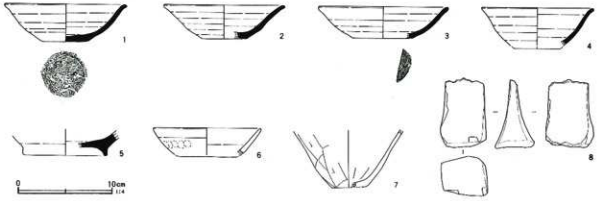
第367図　第115号住居跡出土遺物



第368図　第115・116号住居跡遺物分布図




第369図　第116号住居跡出土遺物




**第117号住居跡（第371図）**

調査区の中央、R－12グリッドに位置している。南西部は後世の土壙ＳＫ1035と重複する。平面形態は長方形で、規模は長辺4.04m、短辺3.23m、深さ0.10mである。主軸方向はN－33°－Eである。

住居跡の覆土はローム粒子、ロームブロックを僅かに含む暗褐色土で構成されていた。土壙と重複する付近は層位が一定ではなく、特にロームブロックが多く

第115号住居跡出土遺物観察表（第367図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (13.2) | 3.8 | (5.4) | BCK | A | 淡青灰色 | 30 | |
| 2 | 坏 | 12.6 | 3.9 | 5.0 | KL | A | 青灰色 | 95 | |
| 3 | 坏 | 13.4 | 3.7 | 6.2 | BCK | C | 淡橙褐色 | 100 | |
| 4 | 坏 | 13.6 | 4.2 | 6.6 | BK | A | 暗赤褐色 | 80 | |
| 5 | 台付甕 | 11.4 | | | BK | A | 淡赤褐色 | 90 | |
| 6 | 小型甕 | 13.0 | | | HKL | A | 暗赤褐色 | 60 | |
| 7 | 砥石 | 長さ(5.25)×幅4.95×厚さ1.25cm、重量54.3g | | | | | | | |
| 8 | 釘 | 長さ(5.8)×幅0.85×厚さ0.5cm、重量14.97g | | | | | | | |

第116号住居跡出土遺物観察表（第369図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 13.0 | 4.0 | 5.0 | BCKL | A | 灰白色 | 95 | |
| 2 | 坏 | (13.0) | 3.6 | (4.8) | K | C | 灰色 | 20 | |
| 3 | 坏 | (13.8) | 3.3 | (6.4) | BCKL | A | 青灰色 | 30 | |
| 4 | 坏 | (12.0) | | | BCKL | C | 灰白色 | 10 | |
| 5 | 高台付埦 | | | (9.0) | K | C | 灰色 | 20 | |
| 6 | 坏 | (11.4) | | | K | | 淡橙褐色 | 30 | 土師器 |
| 7 | 甕 | | | 3.8 | K | A | 暗赤褐色 | 30 | |
| 8 | 砥石 | 長さ(7.3)×幅4.9×厚さ4.3cm、重量116.1g | | | | | | | |

混入していた。床面は中央部付近の凹凸が著しい。

カマドは北東辺中央に1基付設され、袖は殆ど残っていなかったが、袖周辺の覆土中には、構築材とみられる白色粘土が観察された。燃焼面は床面から約5cm掘り込まれ、底面は平坦であった。また、底面の中心部は被熱によって赤変していたが、壁際では殆ど観察されなかった。

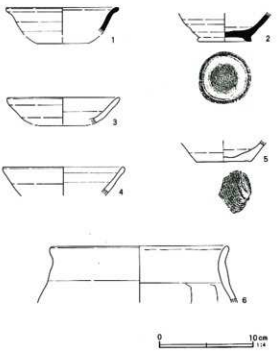
ピットは西隅で1基検出されたが、他には検出されなかった。壁溝はカマドを除いて全周するものとみられ、北側が僅かに深くなっていた。

**出土遺物**（第370図）

出土遺物には須恵器坏、高台付埦、酸化焔焼成坏、土師器甕がある。遺物は小破片が多く、カマド付近に集中していた。

1は須恵器坏の口縁部、2は須恵器高台付埦底部から体部にかけての破片である。3～5は酸化焔焼成の

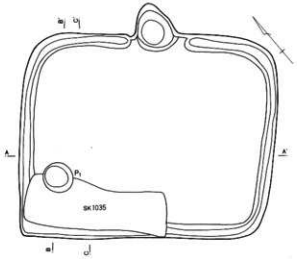
第370図　第117号住居跡出土遺物




第117号住居跡出土遺物観察表（第370図）

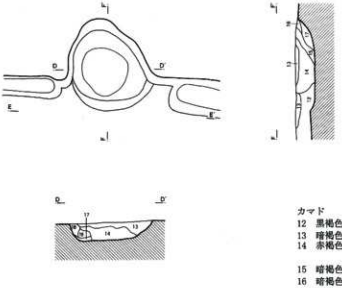
| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (12.0) | | | KL | A | 淡青灰色 | 10 | |
| 2 | 高台付埦 | | | 5.7 | K | C | 淡灰褐色 | 60 | |
| 3 | 坏 | (12.0) | | | K | A | 淡橙褐色 | 10 | 酸化焔焼成 |
| 4 | 坏 | (13.0) | | | K | A | 淡赤褐色 | 10 | 酸化焔焼成 |
| 5 | 坏 | | | (6.0) | K | A | 淡赤褐色 | 30 | 酸化焔焼成 |
| 6 | 甕 | (19.0) | | | BKL | A | 淡赤褐色 | 20 | |

第371図　第117号住居跡・カマド




SJ117

1　暗褐色土　ローム粒子、黒褐色粒子、ロームブロック多量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック微量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量、白色粒子少量含む。
4　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
5　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
6　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
7　灰褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
8　黒褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
9　暗褐色土　ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。
10　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
11　暗褐色土　ロームブロック、ローム塊多量含む。




カマド

12　黒褐色土　焼土粒子、ローム粒子、ロームブロック多量含む。
13　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
14　赤褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量、焼土粒子、焼土ブロック多量含む。
15　暗褐色土　ローム粒子少量、焼土粒子、焼土ブロック多量含む。
16　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子少量含む。
17　暗黄褐色土　ローム粒子多量含む。
18　灰白色土　混入物なし。粘性あり。
19　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、白色粒子少量含む。

坏の破片で、各々形態が異なっている。3は口縁部先端が丸く、器高が低い。4は直線的にひらき、口縁部先端はやや角張っている。5は3・4に比べて厚手である。底部はいずれも回転糸切りとみられる。6は土師器甕の口縁部破片である。口縁部が短く、胴部上半に最大径があるとみられる。

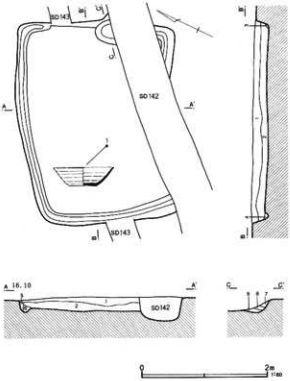
住居跡の年代は、出土遺物から10世紀前半と考えられる。

**第118号住居跡**（第372図）

調査区の中央、やや北寄りのZ－15グリッドに位置している。長辺の東側は後世の溝跡ＳＤ142と重複するため、東辺に付設されたとみられるカマドは大半が壊され、原形を止めていなかった。

平面形態は長方形で、規模は長辺3.25m、短辺2.52m、深さ0.22mである。主軸方向はN－63°－Eである。

第372図　第118号住居跡




ＳＪ１１８

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗褐色土 | 黒褐色粒子少量、ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量、炭化物少量含む。 |
| 3 | 黄褐色土 | 粘性あり。 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。粘性あり。 |
| 5 | 黒褐色土 | ローム粒子微量含む。 |
| 6 | 褐色土 | ローム粒子、暗褐色ブロック多量含む。粘性あり。 |
| 7 | 褐色土 | 焼土粒子少量含む。 |
| 8 | 暗褐色土 | 焼土ブロック、炭化物多量含む。 |
| 9 | 黒褐色土 | 焼土粒子、炭化物微量含む。 |

第373図　第118号住居跡出土遺物

第118号住居跡出土遺物観察表（第373図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 12.8 | 4.1 | 5.8 | BCK | A | 淡灰黄色 | 60 | |

住居跡の覆土は、ローム粒子、ロームブロックを多量含む暗褐色土で構成される。床面は南側に向かって緩やかに傾斜しているが、概ね平坦である。

カマドは左袖付近の燃焼面が一部残っていたが、遺存状態が悪く、殆ど掘形の状態であった。壁溝は遺構の検出状況から、カマド周辺を除いて全周するものとみられる。また、貯蔵穴や柱穴などの付属施設は検出されなかった。

**出土遺物**（第373図）

出土遺物は、攪乱や溝跡との重複で遺構の遺存状態が悪く、遺物も覆土中から須恵器坏が1点出土しただけである。1は須恵器坏で、口縁部先端が僅かに外反する。底部は回転糸切りである。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半頃と考えられる。

**第119号住居跡**（第374図）

調査区の中央、北寄りのY－14グリッドに位置している。平面形態は長方形で、規模は長辺3.64m、短辺3.06m、深さ0.20mである。主軸方向はN－62°－Wである。

覆土はローム粒子を少量含む黒色土で構成される。床面は凹凸があるが、貼り床は検出されなかった。

カマドは西辺中央に2基検出され、検出状況からカマドbが古く、カマドaが新しいと判断した。

カマドbは、壁から約50cm掘り込んで構築されていた。袖や燃焼面はカマドaと重なり、覆土中の焼土などは少なく、底面の被熱も殆ど確認できなかった。

カマドaは壁を約30cm掘り込んで構築され、左右の袖は残存していたが、攪乱によって範囲を明確に捉えることはできなかった。

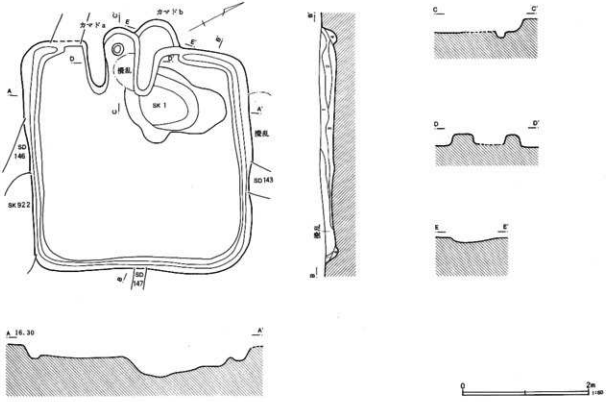
壁溝はカマド周辺を除いて全周し、カマドの変更に伴う壁溝の掘り直しは確認されなかった。また、カマドaの東側から楕円形の土壙SK1が検出されたが、住居に伴うかどうか判断できなかった。

**出土遺物**（第375図）

出土遺物には須恵器坏、皿、土師器甕、鍋などがある。遺物の出土位置は、カマド周辺に集中している。1～5は須恵器坏で、底部が上げ底気味である。6は須恵器高台付埦、7は須恵器皿の破片である。6は体部が内湾し、口縁部先端で大きく屈曲する。9は土師器台付甕の脚部破片である。10～15は、所謂「コ」の字口縁の土師器甕である。16は鍋の破片で、刃部を欠く。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半頃と考えられる。

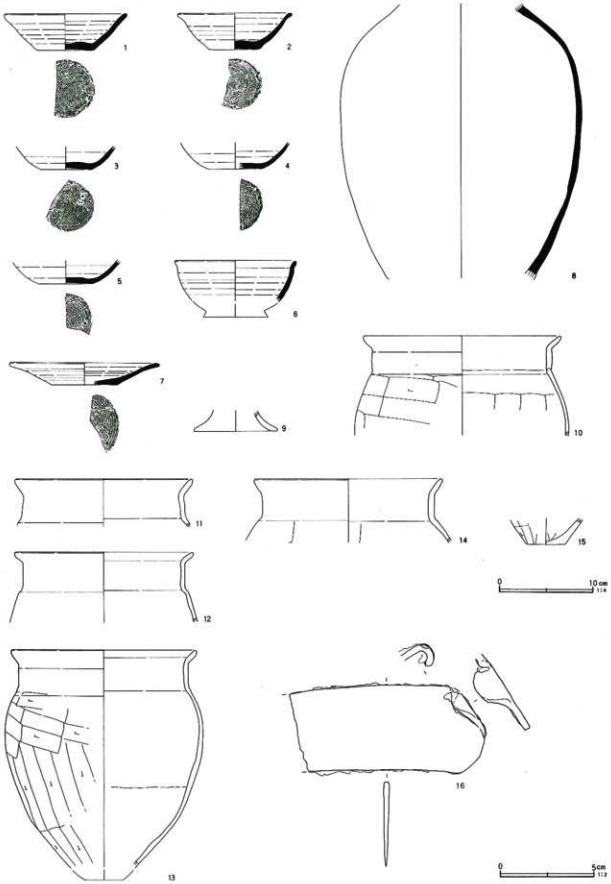
第374図　第119号住居跡



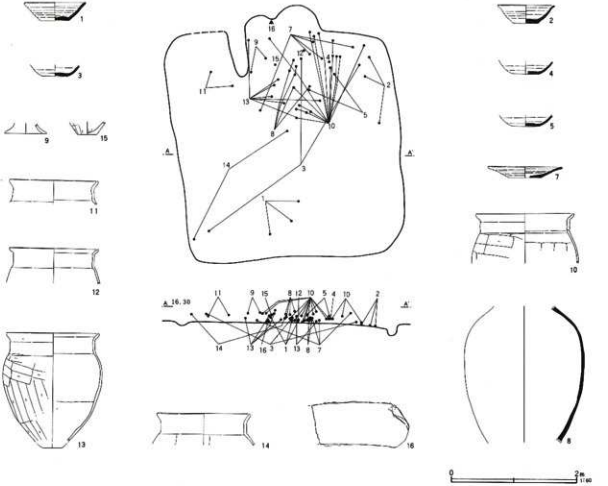

SJ119

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒色土 | ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量含む。 |
| 2 | 黒褐色土 | 灰褐色粘土粒子多量、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子少量含む。 |
| 3 | 黒褐色土 | ローム粒子多量、灰褐色粘土粒子微量、焼土粒子、炭化粒子少量含む。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子微量含む。粘性あり。 |

第375図　第119号住居跡出土遺物



第376図　第119号住居跡遺物分布図



第119号住居跡出土遺物観察表（第375図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (13.2) | 3.8 | (6.2) | BKL | A | 暗灰褐色 | 50 | |
| 2 | 坏 | 12.2 | 3.8 | 5.6 | BCK | A | 淡青灰色 | 50 | |
| 3 | 坏 | | | 5.6 | BCKL | A | 淡青灰色 | 50 | |
| 4 | 坏 | | | (5.6) | BCK | C | 淡灰褐色 | 40 | |
| 5 | 坏 | | | (5.6) | CK | C | 淡橙褐色 | 30 | |
| 6 | 高台付埦 | (13.0) | | | BK | A | 暗灰褐色 | 20 | |
| 7 | 皿 | (16.0) | 2.3 | (7.2) | K | C | 灰褐色 | 40 | |
| 8 | 甕 | | | | BCKL | A | 淡青灰色 | 40 | 内面輪積み痕明瞭 |
| 9 | 台付甕 | | | (9.0) | K | A | 暗茶褐色 | 50 | |
| 10 | 甕 | (21.0) | | | EK | A | 暗淡赤褐色 | 80 | |
| 11 | 甕 | 19.0 | | | HK | A | 淡赤褐色 | 10 | |
| 12 | 甕 | (19.0) | | | GK | A | 淡赤褐色 | 20 | |
| 13 | 甕 | 19.8 | | | BK | A | 淡橙褐色 | 80 | |
| 14 | 甕 | (20.0) | | | GK | A | 暗茶褐色 | 10 | |
| 15 | 甕 | | | (4.1) | GKL | A | 淡黒褐色 | 50 | |
| 16 | 鍑 | 長さ(10.3)×幅4.5×厚さ0.3cm、重量58.53g | | | | | | | 刃部欠 |

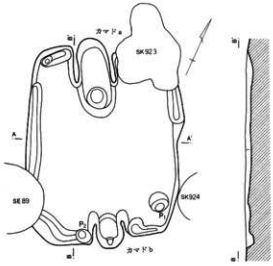
第120号住居跡出土遺物観察表（第377図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 埦 | 15.0 | | | K | A | 灰緑色 | 10 | 灰釉 |

**第120号住居跡（第377図）**

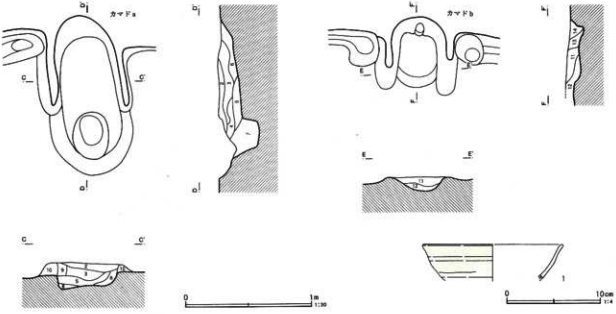
調査区の中央、北側のX・Y－14グリッドに位置し、ＳＪ119と隣接する。平面形態は不整長方形で、規模は長辺3.13m、短辺2.37m、深さ0.07mである。主軸方

第377図　第120号住居跡・カマド・出土遺物




ＳＪ１２０

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量、ロームブロック微量含む。 |
| カマドa | | |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土粒子、ローム粒子、灰褐色ブロック少量含む。 |
| 3 | 灰褐色土 | 焼土粒子、黒褐色ブロック少量含む。 |
| 4 | 灰褐色土 | 焼土ブロック多量含む。粘性あり。 |
| 5 | 暗褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量含む。 |
| 6 | 黄褐色土 | ローム粒子、黒褐色ブロック少量含む。粘性あり。 |
| 7 | 黒褐色土 | ローム粒子、焼土粒子微量、ロームブロック少量含む。 |
| 8 | 黒褐色土 | 焼土粒子微量、ロームブロック少量含む。 |
| 9 | 赤褐色土 | 灰色粘質土が被熱し赤色化している。カマド天井部か。 |
| 10 | 灰色粘土 | 被熱により赤みを帯びる。カマド袖部。粘性あり。 |
| カマドb | | |
| 11 | 黒褐色土 | ローム粒子少量含む。粘性あり。 |
| 12 | 暗黄褐色土 | ローム粒子、黒褐色ブロック少量含む。粘性あり。 |
| 13 | 暗黄褐色土 | 焼土粒子少量、黒色粒子多量含む。 |
| 14 | 暗黄褐色土 | ロームブロック少量含む。 |




向はＮ－31°－Ｗである。

覆土はローム粒子などを少量含む暗褐色土である。

カマドは北辺と南辺中央に１基づつ検出された。新旧関係については、ともに袖も残っているため、同時に存在した可能性も考えられる。ピットは２基検出され、壁溝は攪乱などで部分的に途切れる。

**出土遺物**（第377図）

遺物は覆土中から、灰釉埦が１点出土した。１は口縁部から体部の破片で、釉は漬けかけである。

住居跡の年代は、出土遺物から９世紀後半から10世紀初頭頃と考えられる。

## 3．井戸

本遺跡内において、明らかに古代に遡ると考えられる井戸はC区で検出された第37号井戸と今次調査区内の3基のみであり、合計で4基である。

これらの井戸跡は遺物として9世紀後半にかけての須恵器を出土するものが多い。以上の4基のほかにも須恵器などを出土する井戸跡はあるが、後世の遺物が混入しているものや上層からのみの出土であったりと、明らかに古代に遡るという確証がもてないものである。したがって以上のような井戸は中・近世の井戸の項に記した。

平安時代に比定された井戸跡はC区の第37号井戸もD区の第87号井戸、第94号井戸、第121号井戸もすべてがしっかりとした漏斗形の井戸である。漏斗形の井戸については従来より古いタイプの井戸であるということが言われているが、本遺跡内の古手の井戸はそれに合致している。しかし、別項で述べる近世の井戸の中にも漏斗形の断面形態であるものがあるので、本遺跡の調査結果からは一概に漏斗形の断面形態の井戸が古いとは言えない。

ここで検出された古代の井戸は、すべてが確認面における直径が2mを越えているものであり、これも特徴のひとつと言えよう。

**第87号井戸**（第378・379図）

調査区の西、Z－11グリッドとZ－12グリッドの間に位置している。SD137と重複しており、東側をSD140がかすめている。平面形態は歪な形をしており、北側が突出した円形で最大径は2mであった。井戸は南側から深くなっており、北側は張り出し部分を含めて土壙のような形態になっている。断面形態もやや歪であり、南側がオーバーハングした漏斗型である。深さは1.50mを越え、標高では15.50m付近まで確認した。

遺物は底部が回転糸切りで指圧痕がある須恵器坏（1）、底部が回転糸切りで底部に厚みのある須恵器坏（2）および須恵器の鉢片が出土している。

**第94号井戸**（第378・379図）

調査区中央、S－11グリッドに位置する。S－11グリッドを北西から南東に横切る柵列のピット2基と重複しており、南西4mの位置には第98号井戸がある。確認面における平面形態は円形であり、径は3.20mと本次調査区分の井戸の中では最大の大きさを誇る。断面の形態は1.30mほど擂鉢状の形態を取ったあと真っ直ぐに下がる漏斗型の形態であり、深さは4mを越える。標高では14.20mまで確認した。

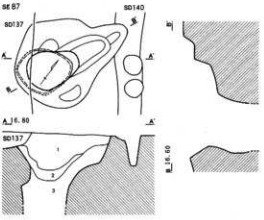
遺物は須恵器の坏が2点（4・5）、長頸瓶か長頸壺と想定される須恵器の破片（7）、内面がヘラ磨き黒色処理された土師器の椀（6）、羽口などが出土している。

**第121号井戸**（第378・379図）

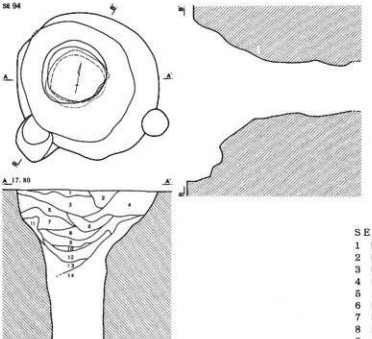
調査区南西のQ－6グリッドとR－6グリッドの中間に位置する。南西にSD103が走行している。確認面における平面形態は円形であるが、底部付近ではやや南北に長い楕円形になる。断面形態は朝顔状に口が開いた漏斗型であり、最大径は2.16mと大型である。深さは確認面から3.45m、底面の標高は14.95mであった。

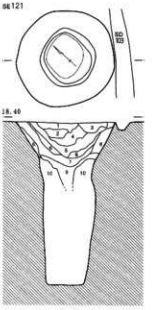
遺物は南比企産の須恵器の坏（8～10）が出土している。8は体部外面および見込みの部分に「土」という墨書がある。他に底部が回転糸切りで酸化焔焼成された坏（13）、外面に平行叩きが施された須恵器の甕（11・12）、いわゆる「コ」の字口縁をもつ土師器の甕などが出土している。

第378図　第87・94・121号井戸




SE87
1　黒褐色土　焼土粒子、ローム粒子少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロック、黒褐色ブロック少量含む。
3　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。

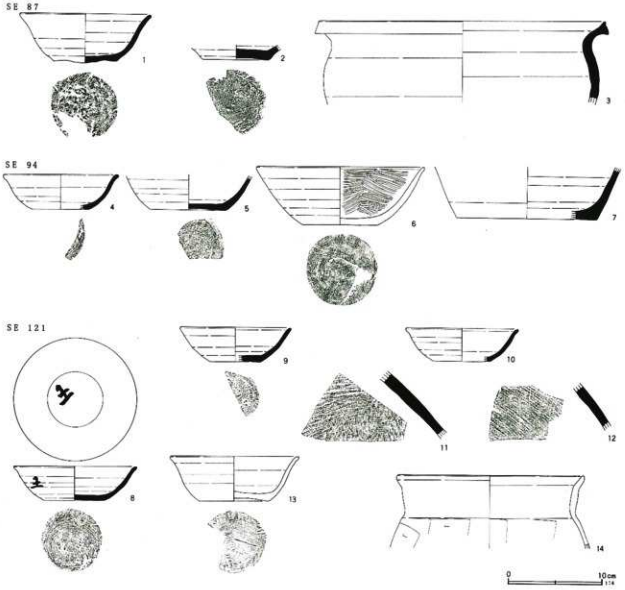



SE121
1　暗褐色土　ローム粒子微量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
3　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
4　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
5　黒褐色土　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
6　暗褐色土　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
7　暗褐色土　ロームブロック多量含む。軟質。
8　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
9　黒褐色土　ロームブロック少量含む。軟質。
10　暗黄褐色土　ロームブロック少量含む。軟質。

SE94
1　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック、灰色ブロック多量含む。
3　明褐色土　ローム粒子、ロームブロック、ローム塊多量含む。
4　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
5　明褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
6　明褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
7　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
8　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
9　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
10　暗褐色土　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
11　暗褐色土　ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。
12　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
13　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
14　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。

第379図　第87・94・121号井戸出土遺物




第87・94・121井戸出土遺物観察表（第379図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (14.0) | 5.2 | (6.8) | KL | C | 灰黄褐色 | 70 | 底部に指の圧痕　SE87 |
| 2 | 坏 | | | 7.0 | BK | A | 灰色 | 50 | SE87 |
| 3 | 鉢 | 30.6 | | | BK | A | 淡青灰色 | 10 | SE87 |
| 4 | 坏 | (12.2) | 3.7 | (6.2) | CK | A | 青黄灰色 | 30 | SE94 |
| 5 | 坏 | | | 8.2 | BCK | A | 淡青灰色 | 20 | SE94 |
| 6 | 瓶 | 18.0 | 6.1 | 8.0 | BCHK | A | 暗茶褐色 | 70 | 内面にミガキ　黒色処理　SE94 |
| 7 | 甕 | | | (15.0) | BK | A | 淡青灰色 | 10 | SE94 |
| 8 | 坏 | 13.0 | 3.6 | 6.4 | BCK | B | 灰褐色 | 95 | 体部と内面に墨書「土」　SE121 |
| 9 | 坏 | (11.8) | 5.6 | (3.6) | BCK | A | 淡橙褐色 | 20 | SE121 |
| 10 | 坏 | (12.0) | 3.5 | (6.2) | CKL | C | 暗灰白色 | 20 | SE121 |
| 11 | 甕 | | | | BKL | A | 青灰色 | 10 | SE121 |
| 12 | 甕 | | | | BCK | A | 暗青灰色 | 10 | SE121 |
| 13 | 坏 | 13.6 | 4.7 | 7.5 | BEK | A | 淡橙褐色 | 60 | SE121 |
| 14 | 甕 | 20.0 | | | HK | A | 暗赤橙褐色 | 35 | SE121 |

# X 中・近世の調査

## 1．調査の概要

今回の調査で検出された中・近世の遺構は掘立柱建物跡18棟、柵列跡13条、溝85条、井戸64基、土壙817基、ピット群などである。既にC区の調査において、古墳時代、平安時代の遺構とともに江戸時代の遺構・遺物が新屋敷遺跡の中心的な位置を占めることは明らかになっていたが、今回調査されたD区ではより鮮明になった。ここでは江戸時代の遺構を中心に取り上げてみたい。

新屋敷遺跡は過去の調査において、中世からの遺構（溝跡）が土台になって近世の遺構が形成されたことはある程度明らかになっていたが、D区の調査では、さらに遺跡の広がりがあることが明らかになった。D区で検出された江戸時代の遺構は調査区の西側に集中している。調査区の中央部や東側でも区画溝と思われるものは検出されたが、出土遺物や隣接するC区との関連から江戸時代以前の可能性が高い。中央部の溝はＳＳ60を挟んで途切れているが、これは中世はもとより近世になっても墳丘が高く残り、要害となっていたものと推測される。その証拠に墳丘のあったと推定される位置に、遺構はまったく検出されていない。

中世の遺構は、溝で「コ」の字状に区画されるもので、A～C区で検出された館跡状の遺構に関連する可能性がある。調査区の中央では、「コ」の字状に巡る溝の中に掘立柱建物跡が１棟検出された。

遺物は常滑産の鉢、青磁碗の破片などが少量出土している。

江戸時代の遺構は、溝で区画された範囲に建物群、柵列、井戸などを配置するものである。区画溝はL字状のものと直線的なものがあり、その組合せで区画が形成されている。区画の中には数棟の掘立柱建物跡、数条の柵列跡、10基余りの井戸があり、さらに区画の中を柵列などで仕切っていたものと推定される。

掘立柱建物跡は18棟検出されたが、主に西側の調査区に集中している。すべての掘立柱建物跡が江戸時代のものとは考えられないが、溝で区画された中に溝とほぼ平行に配置されている建物や中世の溝の上に構築された建物が該当するものとみられる。建物の大きさは大小様々であり、密集する地域には同規模の建物が多い。柱の掘形は円形または楕円形で、柱間は６尺前後のものが多い。また、数棟の建物については重複関係がみられたが、攪乱なども入るため、先後関係は不明瞭である。

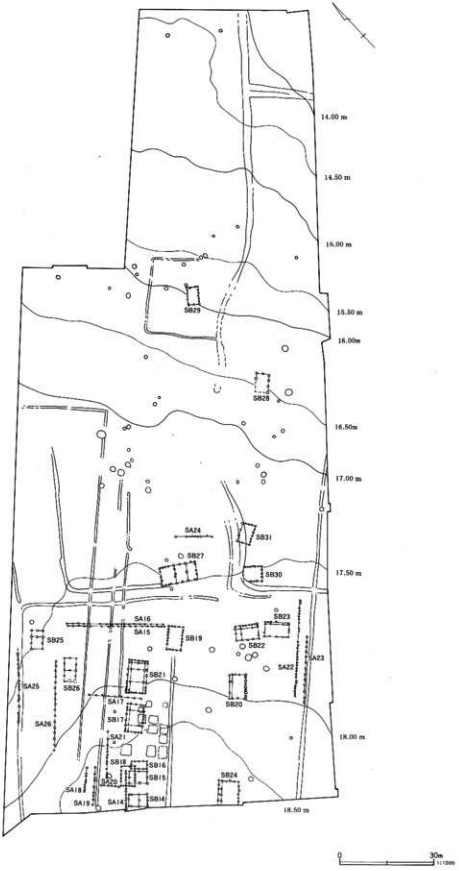
建物の特徴として興味深いのは、身舎から約半間軒を出す屋根の存在である。廂や下屋なども考えられたが、軒の出が短く、差掛屋根状の簡易的な軒と思われる。この差掛屋根状の軒をもつ建物は、D区では６棟、新屋敷全体では８棟検出されており、建物総数の約25%を占めている。

柵列は13条検出され、多くは建物と平行して配置されている。柵列の年代は、すべて江戸時代であるが、大きく二時期に分けられる。一つめは多くの掘立柱建物跡と同時期（17世紀後半）で、建物の密集する地域に建物と接するように配置されている。二つめは掘形の中に天明年間の火山灰が認められるもので、比較的区画溝に平行するか、溝中につくられるものである。後者に伴う建物は現時点では不明瞭であるが、ＳＸ10・11などが建物として伴う可能性がある。

井戸は約65基が出土遺物などから江戸時代（17世紀後半）につくられたものと考えられる。平面形態は円形または楕円形で、断面形態はロート状と円筒状に二分される。完掘できた井戸は、およそ４～５ｍの掘削が行なわれており、他の井戸についても谷地形に近い場合を除いて同様の深度で掘られたものとみられる。また、井戸の総数は建物などの割合からみると多く、建物と遠く離れた位置にも多くみられ、通常の配置から考えると不自然であり、掘立柱建物跡の他にも礎石立建物の存在も考慮する必要があるであろう。

溝は一部「コ」の字状になるものは、出土遺物など

第380図　新屋敷遺跡Ｄ区中・近世の遺構配置図



から江戸時代以前と考えられる。江戸時代の溝は、「L」字状または直線的に掘られ、所々に出入口とみられる「空間」が設けられている。溝の幅や深さは中世に比べて規模は小さい。また、出土遺物は井戸の遺物と同時期の陶磁器類、貝類などが出土している。

## 2．掘立柱建物跡

**第14号掘立柱建物跡（第381図）**

調査区の西側、N－4グリッド他に位置している。

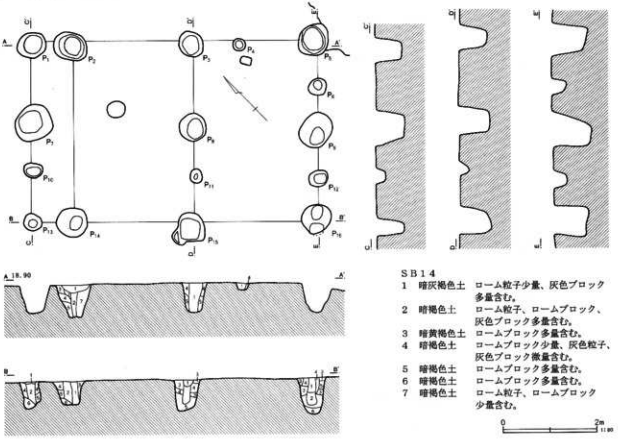
東側に隣接するSB15と規模や主軸なども同じであることから同時期の一群とみることができよう。規模は桁行2間（5.2m）、梁行2間（4m）の総柱建物で、西側に下屋状の柱列が約80cm出ており、差掛屋根の可能性も考えられる。また、西側の側柱列（平面図下）には後述する柱間の間に設けられる小ピットが検出されなかったためと、さらに西側に1間以上延びる可能性も考えられる。

掘形は円形または楕円形で、直径は約50cmで均一であるが、深さは45～60cmとばらつきがある。また、各柱間には直径約20～30cm、深さ約20cmの束柱的な柱穴が一部を除いて存在する。直径が小さく、深さも浅いことから、補助的な柱の可能性が高い。

下屋状に出る柱穴は、規模や柱痕跡も通常の掘形と同じで、単なる扁状の軒とは考えにくい面がある。このような建物の形態は、この遺跡内では多くみられることから、当時の掘立柱建物跡には普及的な構造物であったことが予想される。

覆土は暗灰褐色土で、柱を据えてから埋め戻された土は多量のロームブロックが互層になって含まれる。柱痕跡は直径10～15cmで、覆土上層には多量の灰色ブロックがすべての柱穴で確認された。しかし、補助的

第381図　第14号掘立柱建物跡



な柱穴では灰色ブロックは確認できるが、柱痕跡は不明瞭であった。

柱列の並びは柱痕跡から想定すると、掘形の中央に据えられていたとみられる。補助的な柱列は基本的には総柱建物の柱掘形にそって据えられているが、P11のように柱痕跡の位置が中心を外れる場合もある。

また、建て替えなどによる柱の抜き取り痕跡や掘形内から遺物の出土は認められなかった。

**第15号掘立柱建物跡**（第382図）

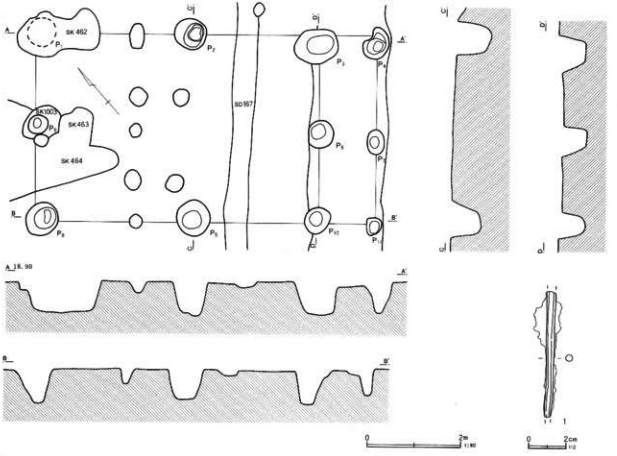
調査区の西側、O－5グリッド他に位置し、SB16・18と重複している。また、遺構内は多くの攪乱や土壙とも重複しており、遺構の遺存状態は良くない。SB15は前述のように規模や主軸がSB14とほぼ同じで、同時期の建物の可能性が高い。しかし、一方では、下屋状の柱列がSB14とは反対の南側に設けられることや束柱的な柱穴が存在しないことなど問題も残されている。

規模は桁行2間（5.8m）×梁行2間（2.0m）の側柱建物で、南側に約半軒の柱間が設けられている。柱穴は円形または楕円形で、直径約60cm、深さ50～60cmである。下屋状の柱穴は、規模がひとまわり小さく、やや浅くなっている。

覆土はロームブロックを少量含む暗褐色土で、上層には灰白色粘土粒子も少量含まれる。柱痕跡は不明瞭であったが、平面図上ではやや外側に柱を据えたものと考えられる。

柱間は梁行は等間であるが、桁行は約60cm北側が長

第382図　第15号掘立柱建物跡・出土遺物




第15号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第382図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鉄製品 | 長さ(6.6)×径0.4cm、重量5.12g | | | | | | | 丸棒状 |

く採られている。また、Ｐ１はＳＫ462、Ｐ４はＳＫ463･1003と重複するため、形状が不明瞭であるが、底面は僅かに掘形が残っていた。

**出土遺物**（第382図）

遺物は覆土中より釘の破片が出土した。断面は円形に近いが、錆の進行が著しく、詳細は不明である。

**第16号掘立柱建物跡**（第383図）

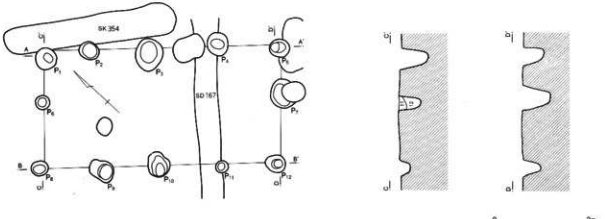
調査区の西側、Ｏ－５グリッドに位置している。ＳＢ15に隣接し、ＳＫ354、ＳＤ167を切り込んで構築されている。主軸はＳＢ14・15とほぼ同じであるが、ＳＤ167との重複関係からＳＢ14･15が古く、ＳＢ16が新しいと判断した。

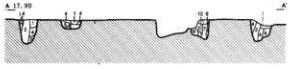
規模は桁行４間（5.0m）、梁行２間（2.3m）の側柱建物である。掘形の平面形態は円形または楕円形で、大きさには大小があるが、ＳＢ14などに比べると、総じて規模は小さい。直径は25～50cm、深さは20～60cmと多様である。

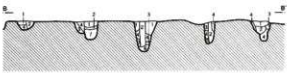
柱間は必ずしも等間ではなく、桁行は北側の１間が、梁行は東側の１間がやや短い。柱痕跡は約10cmで、痕跡の認められた柱穴はいずれも同規模であった。しかし、柱痕跡にみられる深さには各々差異があり、当時の生活面を加味しても、構造物としてのこの掘立柱建物跡はやや不安定な要素を抱えている。また、一方では、北側の１間分の柱間が短く、Ｐ２とＰ９の間に柱穴が存在しないことからは、Ｐ１・５・８の柱列が差掛屋根風になっていた可能性も考えられる。

覆土は、灰色粘土ブロックを多量含む暗灰褐色土で構成されるが、特に大きな土層変化は観察されなかった。灰色粘土ブロックは他の柱穴と同様、覆土上層に集中し、下層では少なくなる傾向がみられた。また、建て替えなどによる柱の抜き取りの痕跡は確認されな

第383図　第16号掘立柱建物跡




ＳＢ１６

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗灰褐色土 | ローム粒子少量、灰色ブロック多量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック、灰色ブロック多量含む。 |
| 3 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | ロームブロック少量、灰色粒子、灰色ブロック微量含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 7 | 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 8 | 黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 9 | 黄褐色土 | ロームブロック少量含む。軟質。 |
| 10 | 明褐色土 | ロームブロック少量含む。軟質。 |
| 11 | 暗灰褐色土 | ローム粒子、灰色粘土粒子微量含む。 |
| 12 | 黒褐色土 | 暗褐色粒子、ローム粒子少量含む。軟質。 |

かった。遺物は出土しなかった。

**第17号掘立柱建物跡（第385図）**

調査区の西側、P－6グリッド他に位置している。規模は桁行5間（8.6m）、梁行2間（3.5m）で、南北に約半間の柱列を設けている。調査時においては、梁行が3間と考えたが、身舎の柱列としては不自然な配置であることから、南北に差掛屋根状の廂をもつ建物と判断した。また、側柱列にはP23・25のように柱間の間に柱穴が設けられているが、断面の観察からは実際に柱穴として機能したかどうかは疑問が残った。

掘形の平面形態は円形または楕円形で、直径は40～50cmと同一規模の範囲であるが、深さは25～50cmと掘形によって差異がみられた。しかし、前述したSB15のように差掛屋根の柱穴が小型化するような傾向は、見当らなかった。

覆土はロームブロック、灰色ブロックを多量含む暗灰褐色土で構成され、他の掘立柱建物跡と同様に灰色ブロックは上層に集中する傾向がみられた。柱痕跡は明瞭に残っているものが少なく、層位に変化がみられるものが多かった。遺物は出土しなかった。

**第18号掘立柱建物跡（第386図）**

調査区の西側、O－4・5グリッドに位置し、SB15・16、SA14と重複している。先後関係は検出状況からSA14に先行し、SB15より後出であるが、SB16との先後関係については判断がつかなかった。

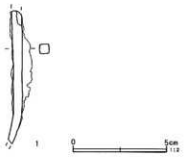
規模は桁行4間（6.3m）、梁行2間（3.5m）で、北側に約半軒の差掛屋根状の柱列がでる側柱建物である。掘形の平面形態は、円形または楕円形である。直径は25～40cm、深さは30cm前後のものが多い。

柱間は桁行、梁行とも約1.8mの等間で構成されている。P3・8・11・14の各柱穴は各柱間の中間付近に配置されているが、深さは主柱となる柱穴に比べて相対的に浅く、束柱などの補助的な部材であったものと思われる。また、基本的にはP3がP14に対応しているように、P8や11に対応する柱穴も北東側の梁行に存在したものと考えられる。柱痕跡については、図示できなかったが、直径10cm弱で、いずれも外側寄りに配置されていたものが多かった。

なお、P6とP10の間には身舎の隅柱が存在したはずであるが、便宜上、SJ53の調査を先行させたため、柱穴の検出には至らなかった。

覆土は灰色粒子、ロームブロックを少量含む暗褐色土で構成され、特に層位に変化は観察されなかった。遺物は出土しなかった。

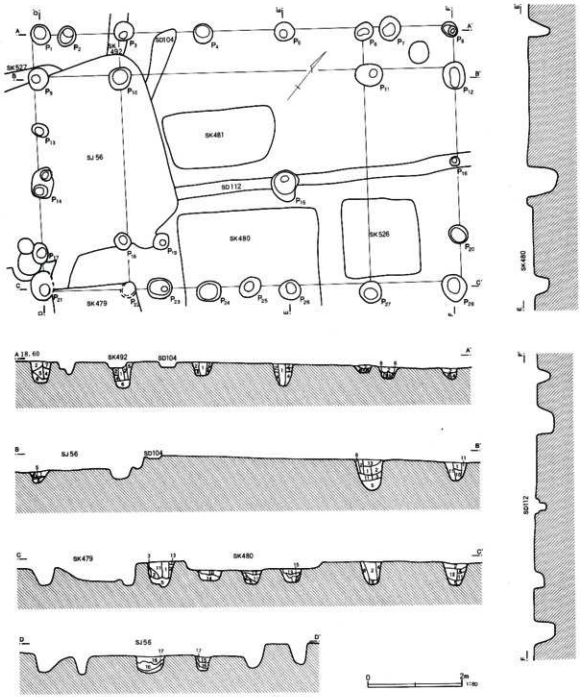
第384図　第17号掘立柱建物跡出土遺物




第17号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第384図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 釘 | 長さ7.0×幅0.5cm、重量8.56g | | | | | | | |

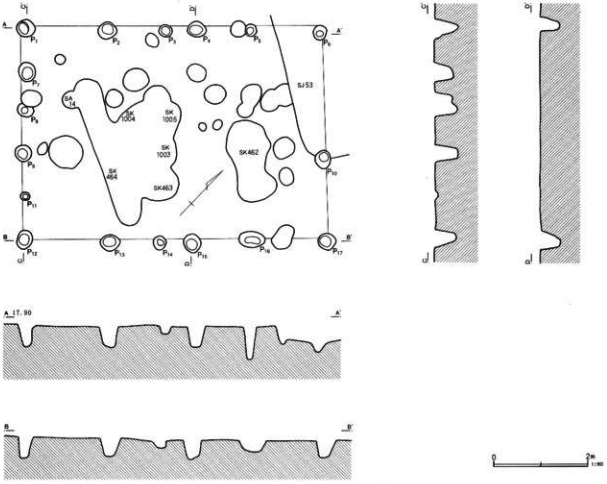
第385図　第17号掘立柱建物跡




SB17

1　暗灰褐色土　灰色粒子、灰色ブロック、ロームブロック多量含む。
2　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
3　黄褐色土　ローム塊。
4　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック微量含む。
5　暗褐色土　灰色粒子少量、ロームブロック多量含む。
6　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
7　灰色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
8　黄褐色土　ロームブロック多量含む。
9　明褐色土　ローム粒子多量含む。
10　暗褐色土　灰色粒子、灰色ブロック、ロームブロック少量含む。
11　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
12　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
13　暗褐色土　ローム粒子微量含む。
14　暗灰褐色土　ロームブロック多量含む。
15　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量、灰色粘土粒子多量含む。
16　暗褐色土　ローム粒子微量、ロームブロック少量、灰色粘土粒子多量含む。
17　暗褐色土　ローム粒子多量含む。

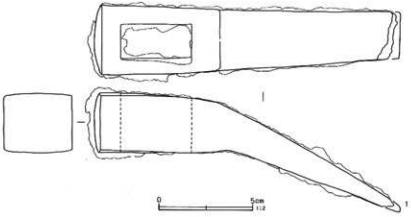
第386図　第18号掘立柱建物跡




**第19号掘立柱建物跡**（第388図）

調査区の西側、Q－9グリッド他に位置している。規模は桁行4間（7.6m）、梁行2間（4.6m）で、各柱間には一部を除いてやや小型の柱穴が配置されている。なお、調査当初、P1・9・11・13・15の柱列はP1を除いてSJ63の中に入っていたが、便宜上、先

第387図　第19号掘立柱建物跡出土遺物

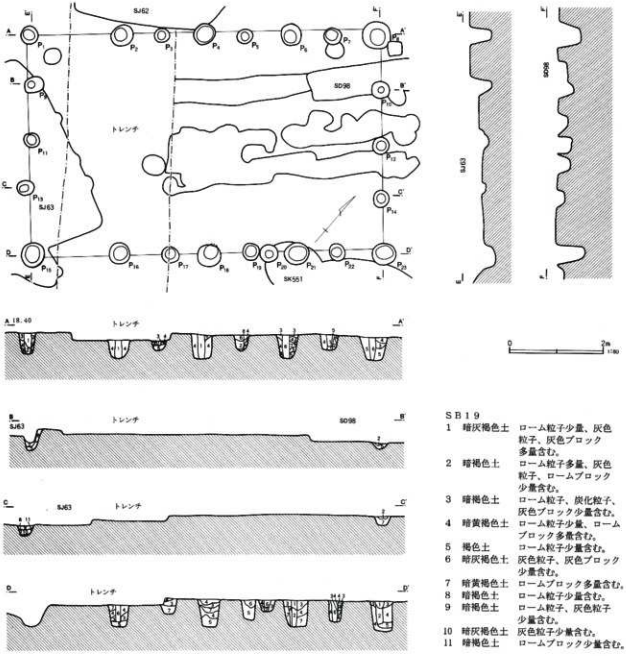


行してＳＪ63の調査を進めたため、遺構の範囲が確定できない結果を招いてしまう面があった。

遺構は試掘調査時のトレンチや攪乱などとも重複しているが、遺存状態は比較的良好であった。

掘形の平面形態は概ね円形で、主柱穴は直径約40cm、深さは約30cmで、同一規模で掘り込まれている。また、小型の柱穴も直径約25cm、深さは約25cmの規模にほぼ統一されている。

第388図　第19号掘立柱建物跡




ＳＢ１９

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗灰褐色土 | ローム粒子少量、灰色粒子、灰色ブロック多量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子多量、灰色粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子、炭化粒子、灰色ブロック少量含む。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。 |
| 5 | 褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 6 | 暗灰褐色土 | 灰色粒子、灰色ブロック少量含む。 |
| 7 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 9 | 暗褐色土 | ローム粒子、灰色粒子少量含む。 |
| 10 | 暗灰褐色土 | 灰色粒子少量含む。 |
| 11 | 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |

第19号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第387図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鉄鏃 | 長さ(16.2)×幅3.1×厚さ3.6cm、重量550.68ｇ | | | | | | | |

覆土は灰色粘土粒子や同ブロックを多量含む暗灰褐色土で構成され、下層や柱痕跡の周囲は多量のロームブロックが含まれていた。柱痕跡は明瞭で、主柱穴の殆どで確認された。柱痕跡は約10cmで、掘形の中心に据えられているものが多かったが、特に隅柱の柱痕跡はすべて掘形の中心にあり、隅柱を基準に建物の桁行、梁行を決めていたものと思われる。

**出土遺物**（第387図）

遺物は鉄製の金槌である。先端部が少し欠けているが、錆による腐食は差程進んでいなかった。

**第20号掘立柱建物跡**（第389図）

調査区の西側、O－9グリッド他に位置している。便宜上、SS55の調査を優先したため、SB20の柱穴のうちいくつかは検出が困難となった。また、P14は後世の土壙SK568と重複するため、南側半分の一部を壊されていた。

規模は桁行4間（7.5m）、梁行2間（4.3m）東西棟で、北側に約80cm、差掛屋根状の軒が出る側柱建物である。北側の側柱列P5と6の間、差掛屋根の柱列P2と3の間には本来ピットが存在したと思われるが、P20に対応するピットはSS55の周溝の斜面に想定されるにもかかわらず、検出されなかった。後述するSB22・23にも同様な形態の建物があり、遺跡の中でも中心的な建物形態の一つである。

側柱列の間には差掛屋根の柱穴よりもさらにひとまわり小型のピットが設けられているが、柱痕跡が明瞭なものは少なく、深さは中心部が浅く、隅の側柱に近い程、少し深くなっていた。

主柱穴の掘形は円形で、直径は約60cm、深さは40～50cmである。差掛屋根の柱掘形は楕円形で、直径は25～30cm、深さは15～20cmである。ともに柱痕跡は明瞭で、中心に据えられているものが多かった。

覆土は灰色ブロックを多量含む暗灰褐色土で構成され、柱の抜き取りなどによる土層の変化は観察されなかった。遺物は出土しなかった。

**第21号掘立柱建物跡**（第390図）

調査区の西側、Q－7グリッド他に位置している。遺跡内では最大級の掘立柱建物跡で、建物を構成する一部のピットについては、他のピットや攪乱などと重複している。

規模は桁行5間（9m）、梁行2間（5m）で、西側を除く各辺に約80cm張り出した差掛屋根状の軒が設けられていた。身舎は柱穴の検出状況から区割りの存在が推定できるが、西側の4間分についてはピットが2基しか検出されず、東側の1間分とは異なった機能をもっていた可能性が考えられる。西側の4間については、南辺、北辺とも対応するように柱間が2間分採ってあり、蹴放や居敷などが柱間に使われていたことも考えられる。

柱間の桁行は6尺等間、梁行は約7尺等間である。一方、差掛屋根状の柱列の配置は、桁行の半間を基本としているが、西隅のP29・30・32の場合はP25と33の間を、P38・39の場合はP37と40の間を等間にした配置である。このような柱の配置は、桁行・梁行間の柱列の対応関係が必ずしも合致するものではないことから、建物の機能上の問題ではないかと思われる。

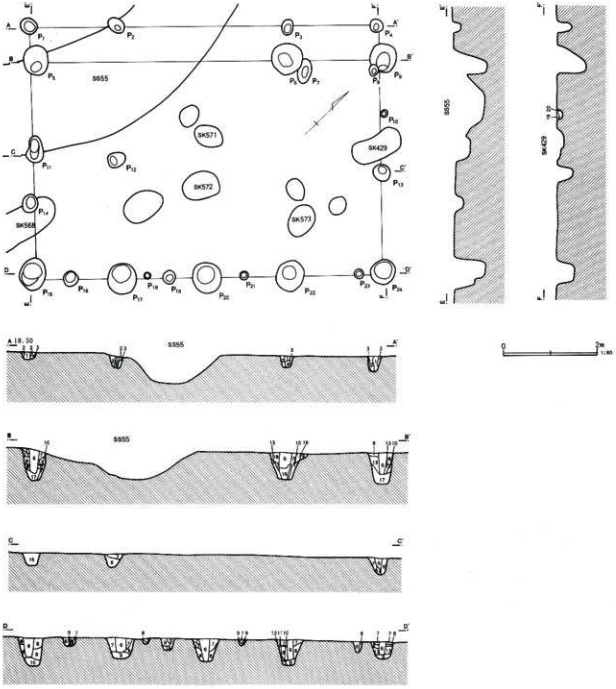
覆土はローム粒子、ロームブロックを多量含む暗褐色土と灰色粘土粒子を多量含む暗褐色土に大きく分けられる。断面の観察などからは、柱の抜き取りの痕跡は確認されなかった。また、柱痕跡が確認された柱穴は少なく、層位にも共通性はあまりみられなかった。

**出土遺物**（第391図）

出土遺物には、かわらけの皿と寛永通宝がある。いずれも柱穴の覆土から出土したものである。

1はかわらけの皿で、厚手なつくりである。底部は周辺の風化が著しいが、回転糸切りは明瞭である。2は銅銭の寛永通宝で、裏面に「文」の文字が入る所謂「文銭」である。

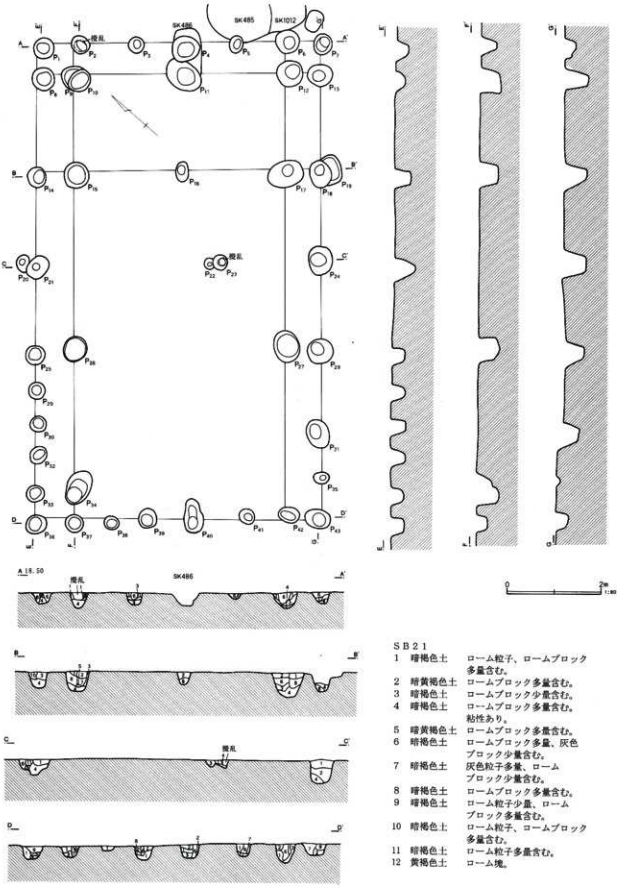
第389図　第20号掘立柱建物跡




SB20

1　暗灰褐色土　ローム粒子、灰色粒子、灰色ブロック多量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。
4　暗褐色土　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
5　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
6　暗灰褐色土　ローム粒子少量、灰色粒子、灰色ブロック多量含む。
7　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
8　暗褐色土　ロームブロック多量含む。
9　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
10　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
11　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
12　明褐色土　ローム粒子少量含む。
13　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
14　暗褐色土　灰色粒子、ローム粒子少量含む。
15　暗褐色土　ローム粒子少量含む。軟質。
16　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
17　暗褐色土　ローム粒子少量含む。粘性あり。
18　黄褐色土　ローム塊。粘性あり。
19　暗灰褐色土　ローム粒子、灰色粒子少量含む。
20　明褐色土　灰色粒子、ロームブロック少量含む。

第390図　第21号掘立柱建物跡




SB21

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 2 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。粘性あり。 |
| 5 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | ロームブロック多量、灰色ブロック少量含む。 |
| 7 | 暗褐色土 | 灰色粒子多量、ロームブロック少量含む。 |
| 8 | 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 9 | 暗褐色土 | ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。 |
| 10 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 11 | 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 12 | 黄褐色土 | ローム塊。 |

第391図　第21号掘立柱建物跡出土遺物

**第22号掘立柱建物跡（第392図）**

調査区の西側、やや南寄りのP－10グリッド他に位置し、同規模のＳＢ23に隣接している。遺構の遺存状態は良好で、殆どのピットが他の遺構と重複しない状態で検出された。

規模は桁行４間（7.2m）、梁行２間（3.8m）で、北側に差掛屋根状の軒が出る側柱建物である。掘形の平面形態は円形で、直径は約50cm、深さは約40cmと同規模の掘形で統一されている。柱間は桁行は等間であったが、梁行は各々異なっている。規模に表れたように、建物全体は整然とした長方形になるように柱穴は配置されており、中間の柱の配置に対しては差程重要な問題ではなかったものと思われる。

柱痕跡は明瞭で、大部分の柱穴から検出された。覆土は灰色粘土ブロックを多量含む暗灰褐色土で構成されるが、柱の抜き取りなどに伴う痕跡は認められなかった。

差掛屋根状の柱穴は、北側の側柱列に沿って９基検出された。柱穴は桁行に沿って配置され、さらにその中間に１基づつ配置されている。掘形の平面形態は円形で、直径は20～25cm、深さは10～30cmである。掘形の深さには差異がみられるが、柱間は桁行の約半間等間にほぼ統一されている。覆土は側柱と同じ暗灰褐色土で構成され、ロームブロックや灰色粘土ブロックが少量含まれる。柱痕跡は掘り込みの深い柱穴には確認されたが、浅いものについては殆ど確認できなかった。遺物は出土しなかった。

**第23号掘立柱建物跡（第393図）**

調査区の西側、やや南寄りのO－11グリッド他に位置し、ＳＢ22の南側に隣接している。主軸はＳＢ22が大きく西に振れているのに対して、ＳＢ23は振れが小さい。なお、遺構は便宜上、ＳＳ56の調査を優先したため、差掛屋根状のピットが一部確認できなかった可能性もある。

規模は桁行４間（7.6m）、梁行２間（3.8m）で、差掛屋根状の軒が北側に出る側柱建物である。掘形の平面形態は円形で、直径は40～50cm、深さは40～65cmとＳＢ22に比べて大きさの統一はされていない。柱間は桁行は等間であるが、梁行はＳＢ22と同様等間を意識しないで配置されている。また、Ｐ６とＰ７の間にピットは検出されなかったが、ＳＢ22と同様建物の機能面と密接な関係があるものと予想される。

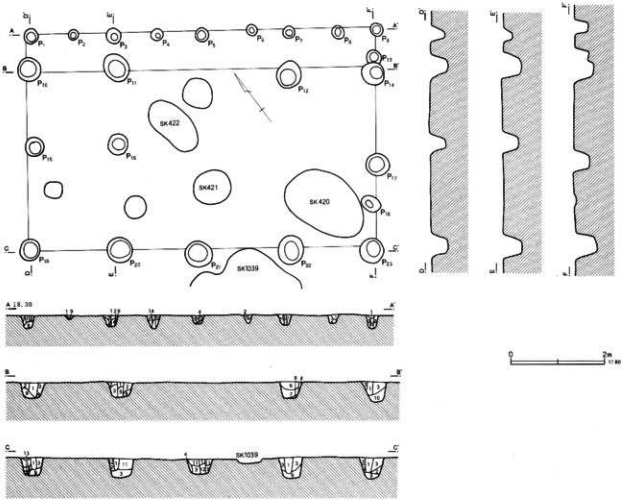
覆土はローム粒子を多量含む暗褐色土で、部分的に灰色粘土粒子が少量混入する場合もある。灰色または灰白色粘土は殆どの掘立柱建物跡の柱掘形内ではブロックとして確認できたが、ＳＢ23ではブロックにはならず、Ｐ５・６で多量の粒子が検出された他は僅かに含まれる程度にとどまった。また、柱の抜き取りなどによる痕跡は認められなかった。

柱痕跡は明瞭で、側柱建物では殆どで検出された。差掛屋根状の柱穴は４基検出されたが、ＳＳ56内に存在したと思われる柱穴については、掘り込みが浅かったためか検出されなかった。Ｐ２については、柱筋から外れており、あるいはこの建物には伴わない可能性も考えられる。基本的には桁行の側柱に沿って配置されており、Ｐ２を関連性のないピットと解釈すると、

第21号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第391図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | かわらけ | 9.0 | 2.1 | 5.8 | EK | A | 淡灰褐色 | 95 | 口縁部には油煙の痕跡 |
| 2 | 寛永通宝 | 直径2.5cm、重量3.25ｇ | | | | | | | |

第392図　第22号掘立柱建物跡

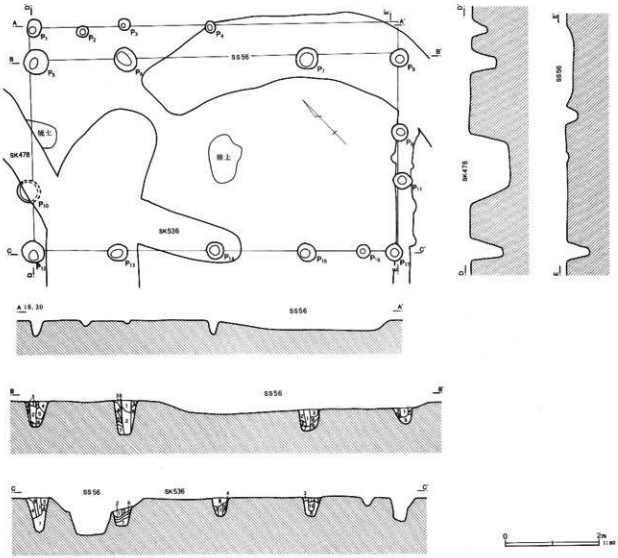



ＳＢ２２
1　暗灰褐色土　灰色粒子、灰色ブロック多量、ローム粒子、ロームブロック少量含む。
2　暗褐色土　灰色粒子、ローム粒子少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量、灰色ブロック少量含む。
4　暗黄褐色土　ロームブロック多量、ローム塊含む。軟質。
5　灰褐色土　炭化粒子少量、灰色粒子、灰色ブロック多量含む。
6　暗褐色土　ロームブロック多量、黒褐色ブロック少量含む。
7　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
8　暗黄褐色土　ロームブロック少量含む。
9　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
10　暗褐色土　ロームブロック多量含む。
11　黒褐色土　ロームブロック多量含む。
12　暗褐色土　灰色粒子、ローム粒子少量含む。
13　暗褐色土　ローム塊。
14　明褐色土　ローム粒子少量含む。
15　暗灰褐色土　灰色粒子、灰色ブロック、ローム粒子、ロームブロック少量含む。

ＳＢ22の形態を省略したもので、ＳＢ22より後出と想定できる。

掘形の平面形態は円形または楕円形で、直径は約20cm、深さは10～30cmである。覆土はローム粒子を少量含む暗褐色土で、灰色粘土粒子や柱痕跡は検出されなかった。なお、遺物は出土しなかった。

第393図　第23号掘立柱建物跡



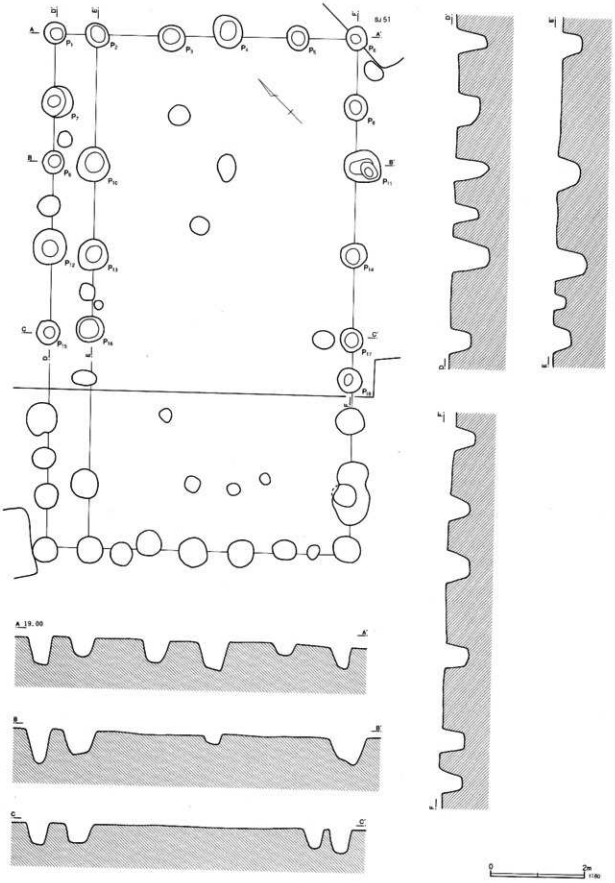

SB23
1　暗褐色土　ローム粒子多量、灰色粒子少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、灰色粒子多量、ロームブロック少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、灰色粒子少量含む。
4　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
5　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
6　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
7　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
8　暗褐色土　ローム粒子微量含む。
9　暗褐色土　ロームブロック多量含む。
10　暗褐色土　ローム粒子微量、灰色粒子少量含む。

**第24号掘立柱建物跡**（第394図）

調査区の西側、M－7グリッド他に位置している。この遺構の約三分の一は、調査区外に属しているが、平成4年の鴻巣市教育委員会による調査で、建物遺構の一部であることが明らかになっていた。今回の調査では、残りの三分の二が検出されたことで、掘立柱建物跡の規模が解明された。

規模は桁行4間または5間(11.2m)、梁行2間(5.6m）の東西棟の建物で、北側に約80cmの差掛屋根状の軒が出る。桁行の柱間は、南辺と北辺の桁行間では対応するものの、等間ではなく間口をどの程度意識したものかは明瞭ではない。また、柱間も他の掘立柱建物跡に比べて広く採られており、あるいは7間程の可能性も考えられる。一方、梁行は柱間に1基づつのピットを配置するもので、この遺跡内では一般的にみられるものである。しかし、この掘立柱建物跡の差掛屋根

第394図　第24号掘立柱建物跡



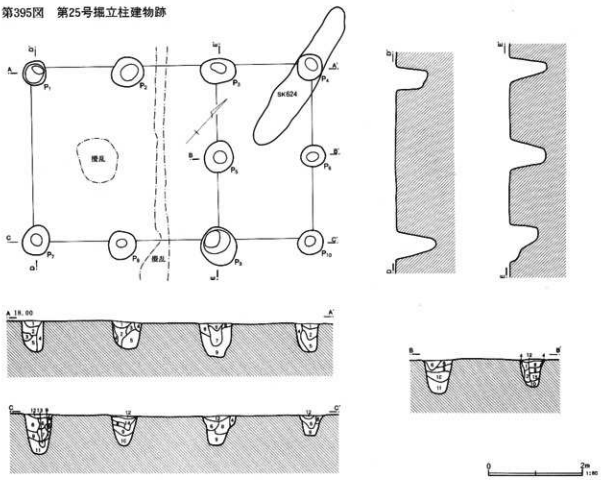
状の軒に接する掘形は、同じような位置が欠けており、出入口などに関連する可能性がある。

掘形の平面形態はほぼ円形で、一部に楕円形のものが含まれる。直径は50～60cm、深さは50～70cmで、やや規格性に欠けているが、差掛屋根状の柱穴も同様な規模である。また、各柱間に入るピットは円形で、やや小振りのものが多く、直径は40cm前後、深さも30～40cmである。

覆土は灰色粘土ブロックを少量含む暗灰褐色土で構成され、多くは上層だけにみられた。下層ではローム粒子やロームブロックが多くみられた。柱痕跡は明瞭で、殆どの柱穴で検出されたが、多くは掘形の底面までは達せず、途中で止まっていた。P11では柱の抜き取りの痕跡が認められた。

遺物は出土しなかった。

第395図　第25号掘立柱建物跡




SB25
1　暗褐色土　ローム粒子、灰色粒子少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
3　褐色土　ロームブロック多量含む。
4　明褐色土　ローム粒子多量含む。
5　褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
6　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
7　暗黄褐色土　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
8　暗黄褐色土　ローム粒子多量含む。
9　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
10　黒褐色土　ローム粒子微量含む。
11　暗褐色土　ローム粒子少量含む。軟質。
12　黒褐色土　ローム粒子、灰色粒子少量含む。
13　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
14　暗褐色土　ローム粒子多量、灰色粒子少量含む。
15　黄褐色土　ロームブロック多量含む。

**第25号掘立柱建物跡**（第395図）

調査区の西側、やや北寄りのT－5グリッド他に位置している。遺構は部分的な攪乱、縄文時代の土壙SK624と重複しているが、遺存状態は比較的良好であった。

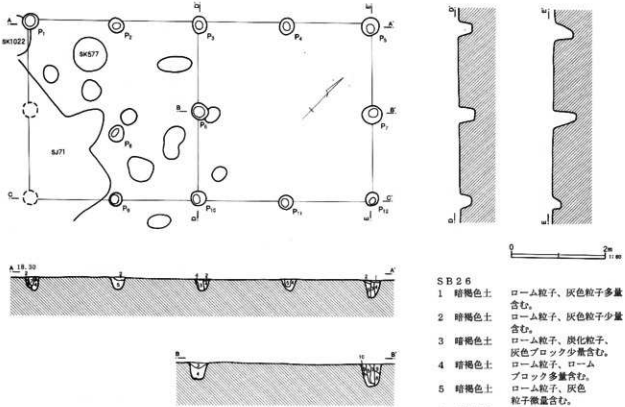
規模は桁行3間（5.8m）、梁行2間（3.7m）の東西棟の側柱建物である。掘形の平面形態は円形または楕円形で、直径は50～70cm、深さは55～80cmと大型で深いものが多いが、相対的には東側の柱列が西側に比べて浅く掘り込まれている。P3とP9の間にはP5が存在するが、西側の側柱列P1とP7、P2とP8の間には柱穴は検出されなかった。

柱間は桁行、梁行とも6尺強の等間で、他の建物に比べて柱間を広く採っているが、桁行と梁行では柱間寸法が異なり、やや梁行短い。

覆土はローム粒子、灰色粘土粒子を少量含む黒褐色土で構成されるが、一部にはロームブロックを多量含む場合もみられる。また、柱の抜き取りに伴う痕跡は認められなかった。

柱痕跡はP3・7では明瞭に確認できたが、他の柱穴では殆ど確認することはできなかった。

第396図　第26号掘立柱建物跡



**第26号掘立柱建物跡（第396図）**

調査区の西側、やや北寄りのＳ－６グリッド他に位置している。遺構はＳＢ25と同様同様、建物群が集中する地点からやや離れた位置に存在する。平安時代の住居跡ＳＪ71の上に構築されているが、便宜上、ＳＪ71の調査を優先させたため、西側に推定される２基の柱穴は住居跡の掘り込みよりも浅かったため、検出されなかった。また、遺構確認面にはこの他に多数の柱穴状のピットが検出されたが、覆土や柱列との関係から建物遺構ではないと判断した。

規模は桁行４間（7.2m）、梁行（3.6m）の東西棟の側柱建物である。柱間は桁行、梁行とも６尺等間である。しかし、内部の柱位置については必ずしも等間に配置されてはいない。梁行柱列の中央部、Ｐ３とＰ11の中間にはＰ６が配置されているが、１間分西側のＰ２とＰ９の間に配置されるＰ８はややＰ９に寄っていた。Ｐ８は覆土や柱列の関係から、この建物に属す柱穴と思われるが、建物の構造上からは側柱列が等間に揃えられていることから考えると、共伴性には疑問も残る。

掘形の平面形態は円形で、直径は約30cm、深さは25～40cmと建物群の中でも小型の部類である。深さについては、30cm弱の柱穴が多く、重複するＳＪ71の掘り込みを考慮すると、住居跡を調査した後での検出は不可能である。

覆土はローム粒子、灰色粒子を多量含む暗褐色土と、灰色ブロックを多量含む灰褐色土に分けられる。後者の灰色ブロックを多量含む層は柱痕跡やその周囲に限られて、主に上層に集中する傾向があり、下層では殆ど確認できなかった。柱痕跡が明瞭なものは前者では少なく、後者に多くみられ、掘形の中央部に据えられていたものが多かった。また、柱の抜き取りなどの痕跡は確認できなかった。

遺物については出土しなかった。

**第27号掘立柱建物跡（第397図）**

調査区の中央部、やや西寄りのＳ－10グリッド他に位置している。ＳＳ58とＳＳ59の上に掛かるように構築されるが、江戸時代の井戸跡と考えられるＳＥ76は、西側の側柱列のＰ14の上に掛かって掘り込まれ、比較的時期の近い中での重複関係もみられた。

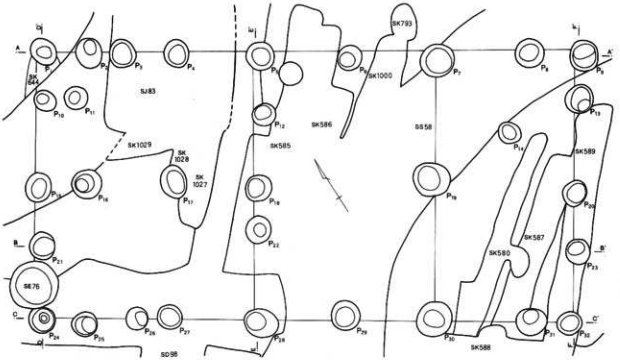
規模は当初、桁行５間（9.4m）、梁行（4.6m）で、南辺を除く３辺に差掛屋根状の軒が出るこの遺跡内では一般的な建物と考えていたが、内部のピットの配列をみると、部屋割りの構造をもっている可能性が明らかになった。従って、ここでは桁行７間(11.2m)、梁行（5.6m）の南北棟の建物と考えておきたい。掘形の平面形態は円形または楕円形で、大きさや深さも様々で規格性に乏しい。直径は45～75cm、深さは30～65cmである。柱痕跡は約半分の柱穴で検出されたが、残りの半分については、部分的に攪乱状になっており、確認できなかった。また、検出された柱痕跡は掘形の底面まで達しているものは少なく、ロームブロックなどを底面に10cm程入れて柱の高さを調節したとみられる痕跡が多かった。

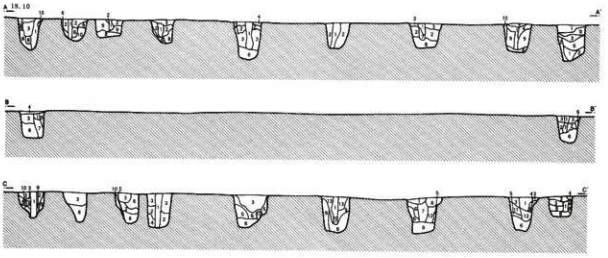
覆土は灰色粘土粒子、灰色粘土ブロックを多量含む暗灰褐色土を基本とし、柱痕跡の周囲などは灰色粘土ブロック、ロームブロックなどが互層になって構成されている。また、覆土中には部分的に攪乱などが入るが、柱の抜き取りなどに伴う土層の変化は観察されなかった。遺物は掘形の底面や覆土中から、出土している。

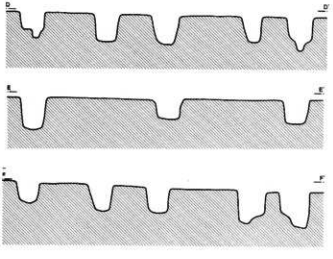
**出土遺物（第398図）**

出土遺物には、かわらけ椀、磁器碗、キセル、釘がある。１は掘形底面、他は覆土中から出土したものである。１はやや風化し、内面にもロクロ痕跡を残している。２は肥前系の染め付け碗で、草木文が描かれている。３はキセルの雁首で、緑青が著しい。４は鉄釘の破片。頭の部分が折れ、先端部は欠けている。錆の進行が著しく、全体に厚く覆っている。

第397図　第27号掘立柱建物跡



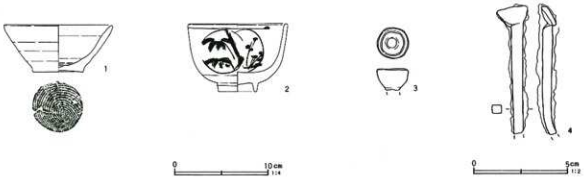





SB27

1　暗灰褐色土　灰色粒子、灰色ブロック多量、ローム
　　ブロック少量含む。
2　暗褐色土　灰色粒子少量、ロームブロック多量含む。
3　暗褐色土　灰色ブロック、ロームブロック多量含む。
4　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
5　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子少量含む。
6　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
7　暗褐色土　ローム粒子、灰色ブロック少量含む。
8　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
9　黒褐色土　ローム粒子少量含む。
10　黄褐色土　ローム塊。
11　暗褐色土　灰色粒子、灰色ブロック少量、ローム
　　ブロック多量含む。
12　暗褐色土　ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。
13　暗灰褐色土　灰色粒子、ロームブロック多量含む。

第398図　第27号掘立柱建物跡出土遺物




第27号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第398図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 碗 | 11.6 | 5.0 | 5.4 | K | A | 淡橙褐色 | 65 | 見込みロクロ目明瞭　やや風化している |
| 2 | 丸碗 | (10.6) | 7.2 | 4.1 | K | A | 淡青白色 | 60 | 肥前系磁器 |
| 3 | キセル | 径1.6cm、重量3.69g | | | | | | | 雁首 |
| 4 | 釘 | 長さ(6.8)×幅0.5cm、重量11.33g | | | | | | | |

**第28号掘立柱建物跡**（第400図）

調査区の中央、やや東寄りのU－16・17グリッドに位置している。便宜上、SS－60の調査を優先させたことや周囲のピット群との関連性で遺構の認定が遅れたためにSS60内に構築されたとみられるピットについては検出することはできなかった。

規模は桁行が4間（5.6m）まで柱穴を確認したが、西側のSS60の傾斜面にはその痕跡を検出することはできなかった。梁行は2間（4.3m）で、桁行より柱間を広く採っているが、約7尺等間である。遺構は他に該当するピットなどが確認されなかったため、桁行は4間あるいは5間、梁行2間の側柱建物と判断した。

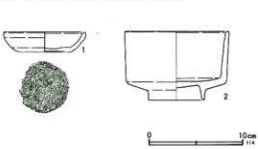
掘形の平面形態は円形または楕円形で、直径は60～75cm、深さは40～65cmである。柱痕跡は覆土の上層に攪乱が入ることもあり、僅かに3基だけ検出された。柱痕跡はSB27でもみられるように掘形の底面までは達しておらず、柱の高さを揃えるためか掘形にロームブロックを10cm余りの厚さで入れていた。

覆土は灰白色粘土ブロックを少量含む暗褐色土で構成され、柱痕跡の周囲に灰白色粘土は集中する傾向がみられた。また、柱の抜き取りなどに伴う痕跡は認められなかった。遺物は柱穴内より数点が出土した。

**出土遺物**（第399図）

遺物にはかわらけと磁器碗がある。遺物は柱掘形の底面ではなく、覆土中より出土している。1はかわらけの皿で、口径に対して底径が大きい。底部は回転糸切りである。2は肥前系の磁器碗で、器面全体に緑褐色の釉薬がかかる。

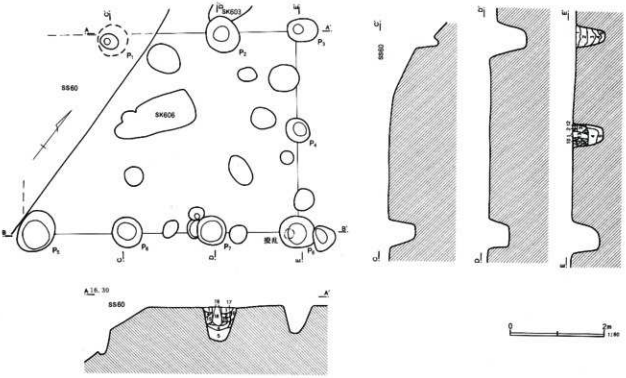
第399図　第28号掘立柱建物跡出土遺物

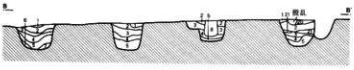



第28号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第399図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | かわらけ | 8.7 | 2.1 | 5.6 | BK | A | 淡赤褐色 | 70 | |
| 2 | 碗 | (11.2) | 7.2 | (6.0) | B | A | 暗緑褐色 | 35 | 肥前系磁器　釉薬全面 |

第400図　第28号掘立柱建物跡




SB28

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗褐色土 | 灰白色粘土ブロック少量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 灰白色粘土ブロック少量含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | ロームブロック、暗褐色ブロック多量含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 7 | 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 8 | 暗褐色土 | ロームブロック、灰色粘土ブロック多量含む。 |
| 9 | 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 10 | 暗褐色土 | ロームブロック、灰白色粘土ブロック、暗褐色ブロック少量含む。 |
| 11 | 暗褐色土 | 灰白色粘土ブロック少量含む。 |
| 12 | 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 13 | 暗褐色土 | 灰褐色粘土ブロック多量含む。 |
| 14 | 暗褐色土 | 灰色粘土ブロック微量含む。 |
| 15 | 暗褐色土 | 灰白色粘土ブロック少量含む。 |
| 16 | 暗褐色土 | ロームブロック、灰色粘土ブロック少量含む。 |
| 17 | 黄褐色土 | 暗褐色ブロック少量含む。 |
| 12 | 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 19 | 暗褐色土 | 灰白色粘土ブロック少量含む。軟質。 |
| 20 | 灰白色土 | 粘土層。 |
| 21 | 黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |

**第29号掘立柱建物跡**（第401図）

調査区の中央、R－13・14グリッドに位置し、中世の溝跡ＳＤ155を切り込んで構築されている。

規模は桁行３間（6.3m）、梁行２間（4.2m）の側柱建物である。南面する桁行と東面する梁行には、中間に各々やや小型の柱穴が設けられている。

主柱となる掘形の平面形態は円形または楕円形で、直径は35～45cm、深さは35～65cmで、総じて西側の梁行の柱列が残くなっている。

覆土はロームブロックを多量含む暗褐色土で、柱の抜き取りなどに伴う痕跡は認められなかった。

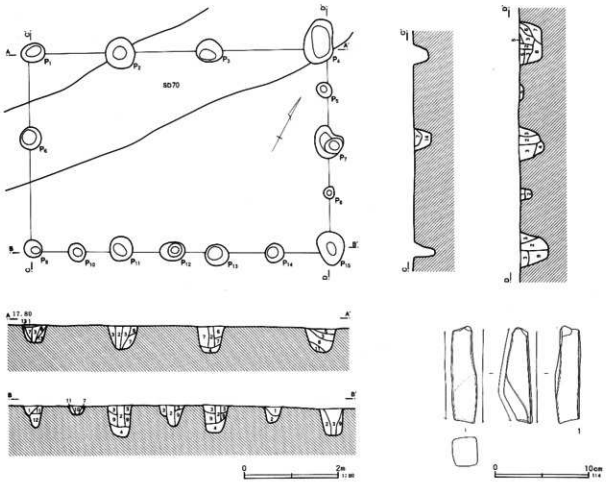
**出土遺物**（第401図）

覆土中より砥石が１点出土した。一部を欠くが、全面にわたって使用痕がみられた。

第29号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第401図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 砥石 | 長さ10.2×幅2.6×厚さ3.0cm、重量92.2ｇ | | | | | | | |

第401図　第29号掘立柱建物跡・出土遺物




SB29

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子、灰色ブロック少量、ロームブロック多量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック、灰色ブロック少量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック、灰色ブロック多量含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | ロームブロック微量含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量、灰色ブロック多量含む。 |
| 7 | 暗褐色土 | ローム粒子、灰色ブロック少量含む。 |
| 8 | 暗褐色土 | ロームブロック、灰色ブロック多量含む。 |
| 9 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 10 | 明褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量、黒褐色粒子少量含む。 |
| 11 | 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 12 | 黒褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 13 | 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 14 | 黒褐色土 | 混入物なし。 |

**第30号掘立柱建物跡（第402図）**

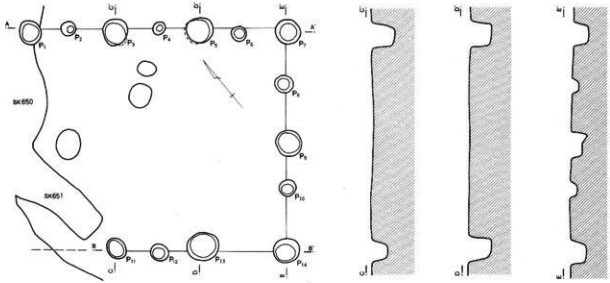
調査区の中央、Q－12グリッドに位置している。西側は中世の溝跡ＳＤ155、近世の土壙ＳＫ650などと重複しているため、西辺梁行の柱列を検出することができなかった。

規模は桁行３間（5.4m）または４間、梁行２間（4.4m）の側柱建物である。各柱間には等間に小型のピットが配置されているが、Ｐ－13と14の間には存在せず、出入口の可能性も考えられる。

掘形の平面形態は円形のものが多く、直径は40～65cm、深さは40～45cmである。小型のピットは直径は20～25cm、深さは５～25cmである。柱痕跡は２～３基のピットで検出されたが、小型を含む大半のピットでは検出されなかった。

覆土はローム粒子を多量含む暗褐色土で構成されるが、少量の灰色粘土粒子やロームブロックが含まれることもある。遺物は出土しなかった。

第402図　第30号掘立柱建物跡




**第31号掘立柱建物跡（第403図）**

調査区の中央、やや東寄りのY－17グリッド他に位置している。一部のピットは部分的に土壙ＳＫ333、816と重複している。

規模は桁行３間（5.5m）、梁行２間（3.6m）の側柱建物である。桁行は６尺等間に近く、Ｐ１と３の間を除いてほぼ中間に小型のピットが設けられている。また、梁行は南側は２間であるが、北側は柱間を変則にして３間にしている。また、身舎の中に設けられている柱穴は梁行の柱筋では通っているが、他の柱穴との関連性がないため、この遺構から除外した。

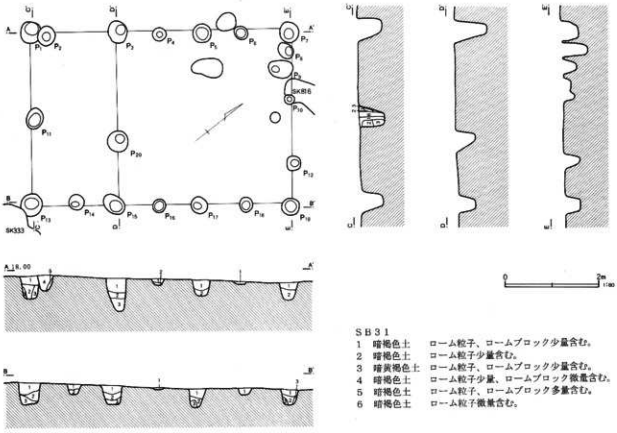
掘形の平面形態は円形が多く、直径は約40cm、深さは40～65cmである。直径や深さはある程度規格性があると思われ、やや掘形の深いＰ３にしても、覆土上層は他のピットと同じ構成である。覆土はローム粒子、ロームブロックを少量含む暗褐色土で構成され、柱の抜き取りなどに伴う痕跡は確認できなかった。また、ピット自体が他の建物に比べて小型であることもあり、殆どのピットで明瞭な柱痕跡を検出することはできなかった。

一方、小型のピットは掘形の平面形態が円形で、直径は約25cm、深さは５～20cmである。覆土は基本的に同じで、掘り込みが浅いためか、柱痕跡は確認できなかった。深さについては様々であるが、主柱となる掘形に比べると、相対的に浅いため、機能的には補助的な柱穴であった可能性が高い。

これに対して北側の梁行の柱列は、中間の掘形が小型になっているが、一定の深さを保っており、側柱の機能をもっていたものと考えられる。

また、Ｐ２やＰ８は主柱となる掘形を切り込んでい

第403図　第31号掘立柱建物跡

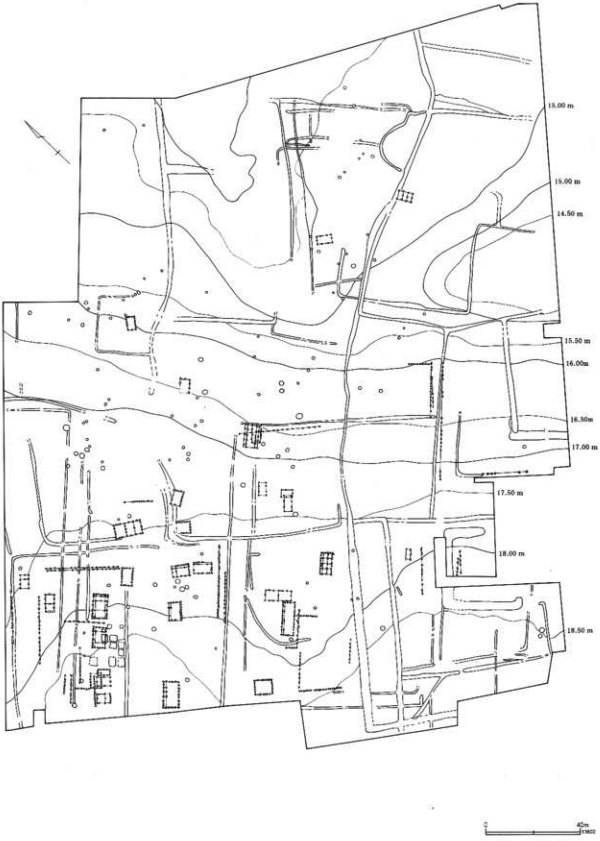



SB31
1　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
3　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
4　暗褐色土　ローム粒子少量、ロームブロック微量含む。
5　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
6　暗褐色土　ローム粒子微量含む。

るが、配置や覆土も微妙に異なるため、後に補助的な柱の掘形として掘られたものとみられる。

なお、遺物は出土しなかった。

第404図　新屋敷遺跡中・近世遺構配置図



## 3．柵列跡

### 概要

新屋敷遺跡D区では13条の柵列跡が検出された。新屋敷遺跡全体では26条となるが、大部分はC・D区の西側調査区に集中している。柵列は基本的に掘立柱建物跡や溝跡と組み合わされるもので、特に溝跡とは平行または直行するように配置されている。

柵列は「塀」としての機能を備えたもので、溝跡の「区画溝」と同様の意味合いをもっている。構築された年代は、大きく分けて二時期が考えられる。一つは東西棟の掘立柱建物跡・L字状に巡る区画溝・井戸跡と組合わさるもので、基本的に柵列の距離は短いものが多く、建物の長さに合わせて構築された可能性が高い。年代的には、出土遺物の大半を占める17世紀後半と考えられる。二つめは、覆土中に天明三年（1873）の火山灰を伴う時期で、この段階に遺跡が廃絶するものと考えられる。溝跡はこの段階でどの程度埋没していたかははっきりしないが、C区では溝の中に覆土に火山灰を伴う柵列が入っているものがあり、後者の段階頃には溝を区画とする機能が失われていたものと推測される。

### 第14号柵列跡（第405図）

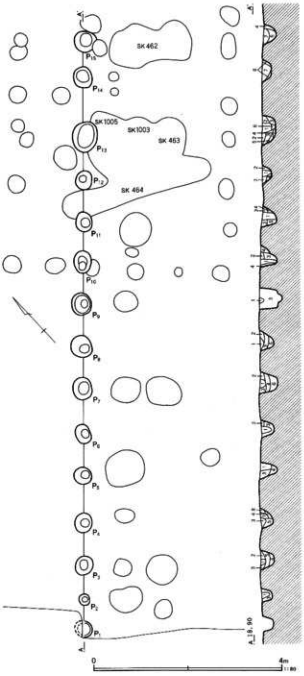
調査区の西側、O－4グリッド他に位置している。SB14・15の北側に、建物に沿って構築され、長さ約13mにわたって検出された。検出状況から判断すると、柱列はさらに西側にのびることが予想されるが、撹乱などにより不明瞭であった。

柱穴は15基検出された。柱間は80～100cmで、中心部分は比較的80cmの等間に統一されている。

掘形の平面形態は、円形または楕円形である。規模は直径20～30cm、深さは20～40cmで、やや不揃いである。断面についても形状が不規則で、柱痕跡から判断できる柱の位置も一定ではなかった。

覆土は灰色粒子、灰色ブロックを多量含む暗灰褐色土で構成され、東側の柱穴については土壙や撹乱との重複から覆土の上層には多少の変化がみられた。

第405図　第14号柵列跡




SA14

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗灰褐色土 | 灰色粒子、灰色ブロック多量、ロームブロック少量含む。軟質。 |
| 2 | 暗灰褐色土 | 灰色粒子、灰色ブロック少量、ロームブロック多量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 4 | 黄褐色土 | ローム塊。 |
| 5 | 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | 灰色粒子、ローム粒子少量含む。軟質。 |
| 7 | 暗灰褐色土 | 灰色粒子、灰色ブロック、ロームブロック含む。 |
| 8 | 黄褐色土 | ローム粒子多量、ローム塊含む。軟質。 |

柱痕跡は、覆土の状態の良いP－10～13で確認することができたが、他の柱穴では検出されなかった。柱痕跡は直径10cm前後で、柱痕跡の明瞭な前記のピットは規則正しく柱筋が整えられていた。

建物跡との関連性については、柱筋が建物と平行し、覆土に類似性がみられることが根拠の要因として上げられる。しかし、建物との距離については、SB14とは約80cm弱、SB15とは約90cmと微妙に差があり、建物との同時性に問題が残る。遺物は出土しなかった。

**第15号柵列跡（第407図）**

調査区の中央、やや西寄りのT－6～Q－9グリッドにかけて位置し、SA16と接して構築されている。この柵列跡は、江戸時代の溝跡SD95、99、103の上にかかり、SA16との重複関係ではその掘形を掘り込んで構築されている。検出されたのは約36mである。

掘形の平面形態は方形で、隅丸方形のピットも一部含まれる。掘形の大きさは長辺約30cm、深さ20～35cmである。柱間は180cmの等間である。

覆土は灰色粒子、ローム粒子を少量含む灰褐色土で構成されるが、柱の抜き取りなどに伴う土層の変化は観察されなかった。また、砂粒混じりの灰色粒子は、天明三年に噴火した浅間山の火山灰と考えられ、この粒子が上層にしかみられないことを考慮すると、SA15はこの時期頃に廃絶したものと考えられる。

柱痕跡は殆どのピットで確認され、P16には柱の一部が残っていた。直径は約10cmの円柱で、掘形に入る一部を削っている他は、加工はされていないようであった。柱痕跡の多くは、掘形の中央に位置し、P1～18までは直線上に柱筋が並ぶが、P19についてはやや北寄りに振れている。

**出土遺物（第406図）**

遺物は掘形内より、丸棒状の不明鉄製品が1点出土した。

**第16号柵列跡（第408図）**

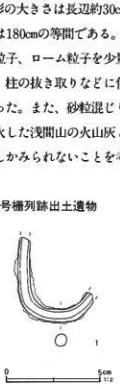
調査区の中央、やや西寄りにSA15と平行して位置している。部分的な重複関係などからSA15に先行して構築されたと考えられ、柱の位置を数10cm北寄りに配置している。

柱列は約30mにわたって検出された。柱穴は17基で、柱間はSA15と同様180cmの等間である。掘形の平面形態は円形または楕円形で、直径は約30～40cm、深さは20～25cmとSA15と同規模である。

覆土は灰色粒子、ローム粒子、ロームブロックを含む灰褐色土である。特に下層はロームブロックが多く見られたが、柱の高さ調整のために掘形内に入れられたものと推定される。

柱痕跡は明瞭で、殆どの柱穴で検出された。断面観察で確認した痕跡からは、直径が約10cmの円柱と推定される。遺物は出土しなかった。

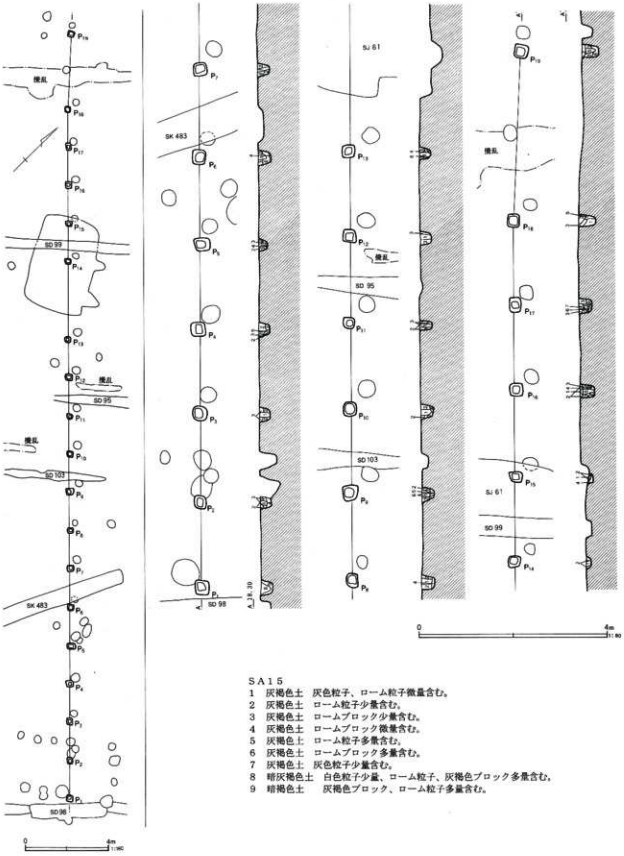
第406図　第15号柵列跡出土遺物




第15号柵列跡出土遺物観察表（第406図）

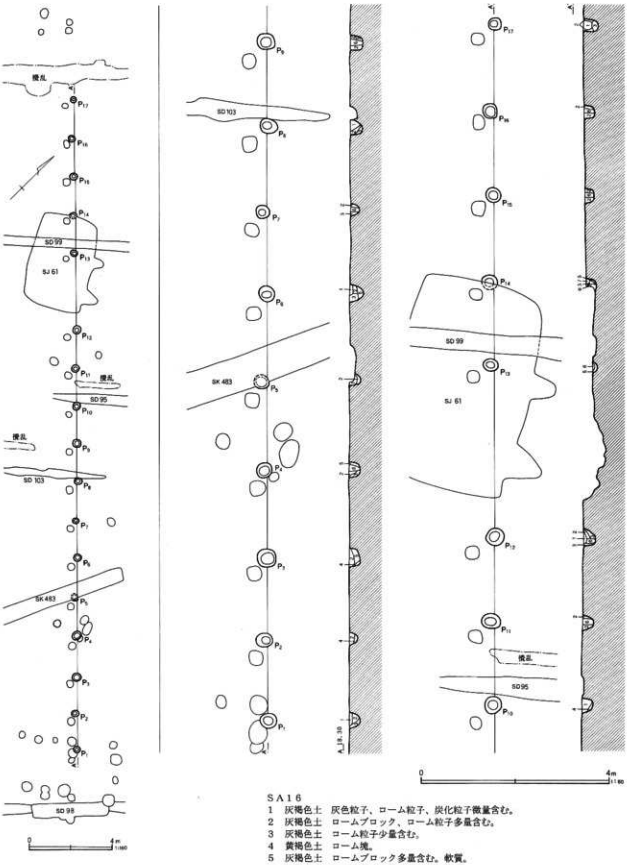
| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鉄製品 | 長さ(4.4)×径0.6cm、重量11.06g | | | | | | | 丸棒状 |

第407図　第15号柵列跡



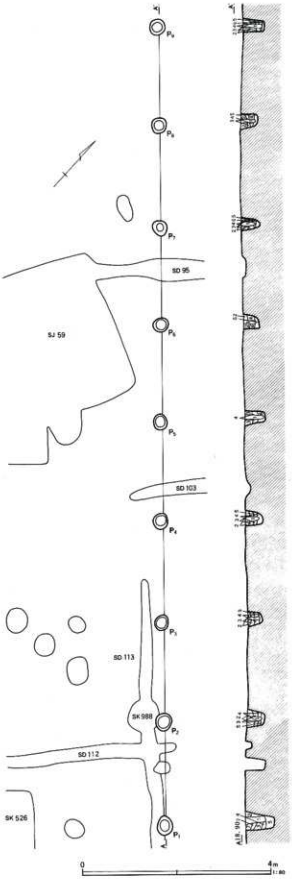

SA15
1　灰褐色土　灰色粒子、ローム粒子微量含む。
2　灰褐色土　ローム粒子少量含む。
3　灰褐色土　ロームブロック少量含む。
4　灰褐色土　ロームブロック微量含む。
5　灰褐色土　ローム粒子多量含む。
6　灰褐色土　ロームブロック多量含む。
7　灰褐色土　灰色粒子少量含む。
8　暗灰褐色土　白色粒子少量、ローム粒子、灰褐色ブロック多量含む。
9　暗褐色土　灰褐色ブロック、ローム粒子多量含む。

第408図　第16号柵列跡




SA16
1　灰褐色土　灰色粒子、ローム粒子、炭化粒子微量含む。
2　灰褐色土　ロームブロック、ローム粒子多量含む。
3　灰褐色土　ローム粒子少量含む。
4　黄褐色土　ローム塊。
5　灰褐色土　ロームブロック多量含む。軟質。
6　灰褐色土　ローム粒子、焼土粒子少量含む。

第409図　第17号柵列跡




ＳＡ１７
1　暗褐色土　灰褐色粒子少量含む。
2　黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量、灰褐色粒子少量含む。
3　灰褐色土　灰褐色粒子多量、暗黄褐色ロームブロック少量含む。
4　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
5　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。硬質。
6　褐色土　褐色粒子多量含む。
7　灰褐色土　灰褐色粒子、暗黄褐色粒子多量含む。

**第17号柵列跡**（第409図）

調査区の西側中央、Ｐ－７グリッド～Ｒ－４グリッドにかけて位置している。ＳＢ17と21の中間に構築され、ＳＡ20と平行、ＳＡ21と直交する。主軸方向は、北から約45度余り西に振れている。

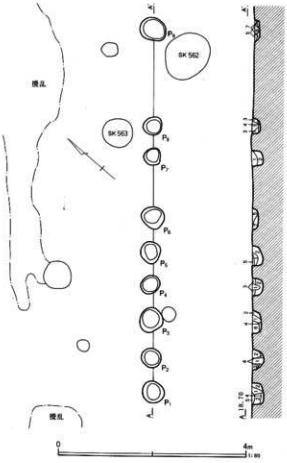
柱列は約17ｍにわたって検出された。南側のピットはＳＤ113を切り込んで構築されているが、その重複関係などによって、推定されるピットは確認できなかった。ピットは９基検出され、柱間は約２ｍの等間である。

掘形の平面形態は、円形または楕円形である。直径は約30cm、深さは30～45cmである。

覆土は灰褐色粘土粒子を少量含む暗褐色土で構成され、柱の抜き取りなどに伴う痕跡は観察されなかった。灰褐色粘土粒子は、多くの掘立柱建物跡にみられた灰色粘土粒子などと基本的には同じで、遺構によって多少色調に変化がみられる。

柱痕跡はすべてのピットで検出された。断面の観察では、柱は必ずしも掘形の中心に柱が据えられているのではなく、掘形によって差違が見られた。また、掘形の深さはピットによって異なっているが、柱痕跡の底面は殆どのピットで揃えられていた。痕跡から推定される柱の太さは約10cmで、柱を据えてつき固める際にはロームブロックなどを入れているが、片側だけ互相突き固めているものが多かった。遺物は出土しなかった。

第410図　第18号柵列跡




SA18
1　暗灰褐色土　灰褐色粒子多量含む。
2　黒褐色土　炭化粒子、ローム粒子、ロームブロック少量、灰褐色粒子微量含む。
3　黒褐色土　炭化粒子、褐色粒子少量含む。
4　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
5　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
6　暗褐色土　ローム粒子少量、褐色粒子多量含む。
7　褐色土　ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。
8　灰褐色土　灰褐色粒子多量、ローム粒子少量含む。

**第18号柵列跡**（第410図）

調査区の西側、P－4・5グリッドに位置している。SA19・SD116・117と平行しているが、関連性は不明である。

柱列は約8mにわたって検出された。柱筋こそ通るが、柱間は不揃いであった。P1～6までは約80cmの等間であるが、P7～9までは不規則である。

掘形の平面形態は、円形または楕円形である。直径は約40cm、深さは20～30cmである。

覆土は基本的に、灰褐色粒子を多量含む暗灰褐色土で構成されるが、部分的に炭化粒子を含む場合が多く見られた。柱の抜きとりなどに伴う痕跡は認められなかった。

**出土遺物**（第411図）

柱穴内よりキセルの雁首が1点出土した。銅製であるが、錆によって青緑色に変化している。首の部分は残存状況から「灰落とし」をする際の接触によって折れたものと推測される。

第411図　第18号柵列跡出土遺物

第18号柵列跡出土遺物観察表（第411図）

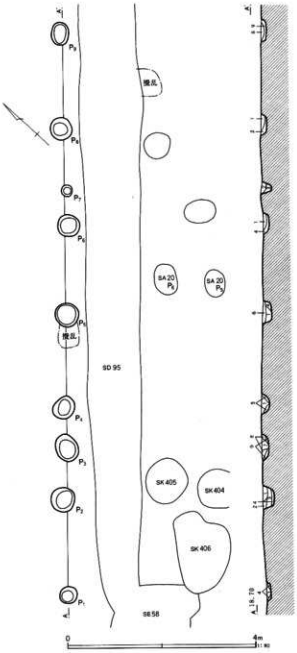
| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | キセル | 径2.1cm、重量4.07g | | | | | | | 銅製　雁首 |

**第19号柵列跡**（第412図）

調査区の西側、O－3～P－4グリッドにかけて位置している。SD117や95と平行しているが、併存したかどうかは不明である。

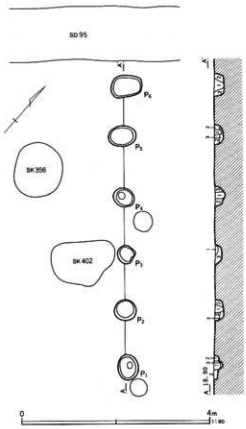
柱列は約12mにわたって検出された。柱間や掘形の大きさも不統一である。掘形の平面形態は、円形または楕円形である。直径は約40cm、深さは15～30cmである。覆土は灰褐色粘土粒子を多量含む灰褐色土で構成されている。柱痕跡は確認されなかった。また、遺物についても出土しなかった。

第412図　第19号柵列跡




ＳＡ１９
1　灰褐色土　　灰褐色粘土粒子多量、ローム粒子少量含む。
2　褐色土　　ローム粒子少量含む。
3　暗黄褐色土　ロームブロック、ローム粒子多量含む。
4　暗褐色土　　ロームブロック多量含む。
5　灰褐色土　　灰褐色粘土粒子多量、褐色粒子少量含む。
6　暗褐色土　　灰褐色粘土粒子、暗褐色粒子多量、ローム粒子少量含む。
7　黒褐色土　　ローム粒子少量含む。
8　暗褐色土　　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
9　褐色土　　ロームブロック多量含む。

第413図　第20号柵列跡




ＳＡ２０
1　灰褐色土　　灰褐色粒子多量、ローム粒子少量含む。
2　暗灰褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
3　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。

**第20号柵列跡（第413図）**

調査区の西側、Ｏ－４グリッドにＳＢ18と接するように構築されている。

柱列は約６ｍにわたって検出されたが、直交するＳＤ95に１基分のピットが入っている可能性も考えられる。

ピットは６基検出され、約１ｍの等間である。掘形の平面形態は、円形または楕円形である。直径は30～50cm、深さは約20cmである。

覆土は灰褐色粘土粒子を多量含む灰褐色土で構成され、数基のピットからは柱痕跡が検出された。遺物は

出土しなかった。

**第21号柵列跡（第414図）**

調査区の西側、P－4・5グリッドに位置し、SD95の南側、約2mに平行して構築されている。SD95とは覆土などで共通性がみられることから、同時期頃の遺構と推測される。また、南側は江戸時代の井戸跡SE63と重複して壊されていることから、17世紀後半以前と考えられる。

柱列は約14mにわたって検出された。掘形の平面形態は概ね円形で、直径は約30cm、深さは15～30cmである。柱穴は11基検出されたが、等間となるのは中心部分だけで、外側は不規則であった。

覆土はローム粒子を多量含む暗褐色土で構成されるが、撹乱などで部分的に影響はでているが、柱の抜き取りなどに伴う痕跡は認められなかった。遺物は出土しなかった。

**第22号柵列跡（第415図）**

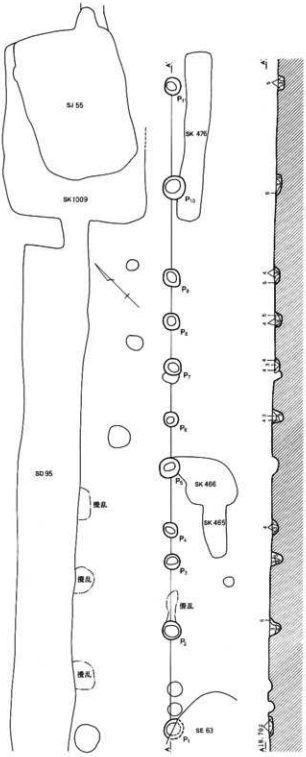
調査区の南側、M－10～O－12グリッドにかけて位置している。北側のSD101と平行するが、東側のピットの一部にかかっており、併存する遺構ではないと判断した。

柱列は約31mにわたっており、30基のピットを検出した。柱間はピットが接近したり、抜けていたりして一見不規則にみえるが、基本的には約180cmの等間で、偶数番号のピットはその中間に配置したものと推測される。

掘形の平面形態は円形または楕円形で、直径は約30cm、深さは20～40cmである。

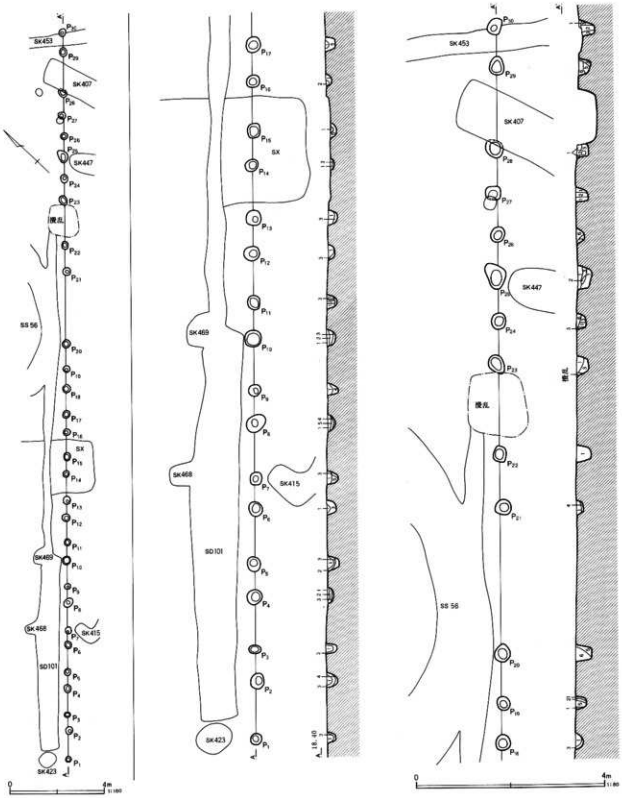
覆土はローム粒子、ロームブロックを多量含む灰褐色土で構成され、柱痕跡の周囲に灰色粘土が集中していた。柱の抜き取りなどに伴う痕跡は、認められなかった。柱痕跡は数基のピットで検出されたが、その他のピットは、相対的に掘り込みが浅いため、多くは一度に埋まったような痕跡を示していた。遺物は出土しなかった。

第414図　第21号柵列跡




SA21
1　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
2　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
3　灰褐色土　灰褐色粒子、ローム粒子多量含む。
4　暗灰褐色土　灰褐色粒子、ローム粒子多量、褐色粒子少量含む。軟質。
5　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。

第415図　第22号柵列跡




SA22
1　灰褐色土　　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
2　灰褐色土　　灰色粒子、ローム粒子少量含む。
3　明褐色土　　灰褐色粒子、灰褐色ブロック含む。粘性あり。
4　明褐色土　　ロームブロック含む。粘性あり。
5　明灰褐色土　ロームブロック含む。
6　灰褐色土　　ロームブロック多量含む。
7　暗灰褐色土　ローム粒子少量含む。

**第23号柵列跡（第416図）**

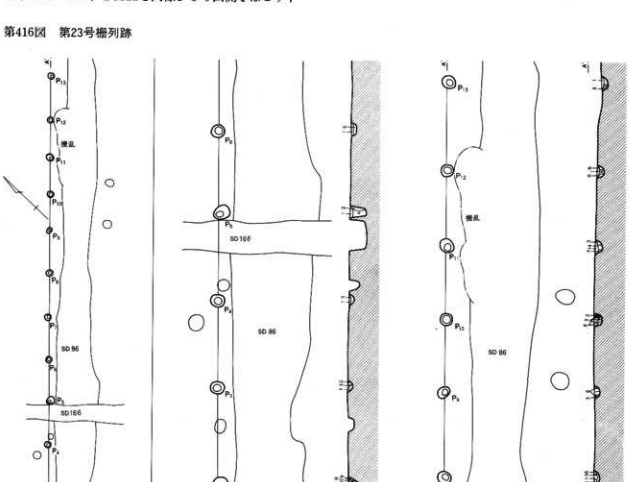
調査区の南側、M－10～N－12グリッドにかけて位置している。ＳＡ22の約３ｍ南側に隣接し、20ｍ余りにわたって平行する。覆土や柱間の採り方などから、ＳＡ22とほぼ同時期に構築されたものと考えられる。

柱列は約21ｍにわたり、13基のピットが検出された。柱間は約180cmの等間で、西側がやや狭くなる傾向を示しているが、ＳＡ22と同様Ｐ１の西側ではピットは構築されなかった模様である。

掘形の平面形態は円形で、直径は約30cm、深さは20～25cmである。

覆土はローム粒子を少量含む灰褐色土であるが、覆土上層では灰色の砂粒が多く含まれていた。柱痕跡は掘り込みが浅いこともあり、殆ど検出されなかった。遺物は出土しなかった。

第416図　第23号柵列跡




ＳＡ２３
1　灰褐色土　　ローム粒子少量含む。
2　灰褐色土　　灰白色粒子少量含む。
3　明褐色土　　ローム粒子少量含む。
4　灰褐色土　　ローム粒子、灰白色粒子含む。
5　黒褐色土　　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
6　明灰褐色土　ロームブロック多量含む。
7　暗灰褐色土　ローム粒子少量、灰色粒子多量含む。
8　黒褐色土　　ローム粒子多量、灰色粒子少量含む。
9　暗褐色土　　ローム粒子少量含む。
10　暗黄褐色土　ロームブロック，ローム塊含む。
11　暗褐色土　　灰色粒子少量、ロームブロック多量含む。
12　暗灰褐色土　ローム粒子少量含む。
13　暗灰褐色土　ローム粒子多量含む。

**第24号柵列跡（第417図）**

調査区の中央部、S－11～12グリッドにかけて位置している。SE94、SK868・869などと重複するが、いずれもこの遺構が上にかかっていた。なお、便宜上SE94の調査を優先したため、SE94内に推定されるピットは結果的に省くこととなった。

柱列は約12mにわたり、8基のピットが検出された。掘形の平面形態は円形で、直径は25～40cm、深さは25～50cmである。大きさや深さとも不統一で、規格性はみられなかった。また、P4については、覆土の状況が異なるため、別の遺構の可能性も考えられる。

覆土はローム粒子を多量含む暗褐色土で構成され、数基のピットで柱痕跡が検出された。基本的には柱痕跡の覆土となっていた。柱痕跡はやや不明瞭で、数基で検出された。遺物は出土しなかった。

**第25号柵列跡（第418図）**

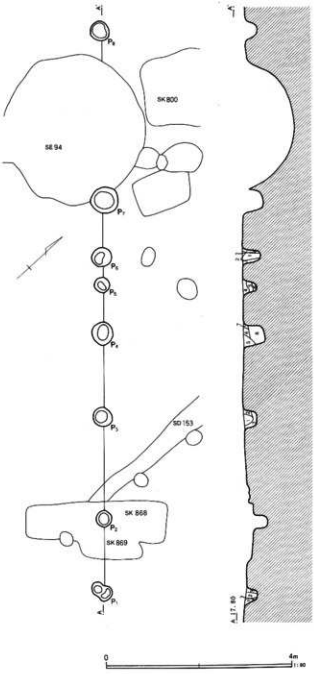
調査区の北西、S－3～U－5グリッドにかけて位置している。SD105・106が埋没した後、その中に構築されている。また、複数の遺構との重複しているため、ピットの形状などが変形しているものもみられた。

柱列は約22mにわたり、16基のピットが検出されたが、ピットによっては柱の据え替えが行われているものもある。P4やP8では、柱の差し替えを行っているが、断面観察からの先後関係は不明瞭であった。柱間は不統一で、柱筋の通りも曖昧である。

掘形の平面形態は楕円形が多く、大きさも様々である。また、深さも多様で、この遺構に伴わないピットも含まれている可能性がある。

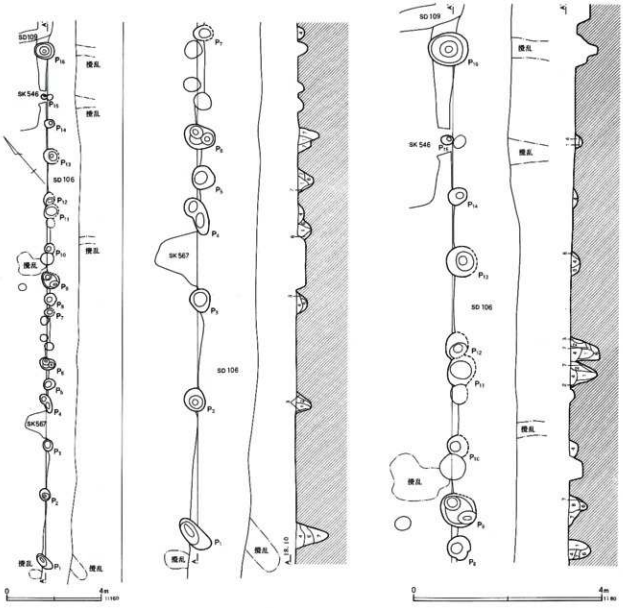
覆土はローム粒子を少量含む暗褐色土が基本で、ピットによっては黒褐色土になる場合もみられた。柱痕跡はやや不明瞭で、掘形自体が崩落しているものが多くみられた。遺物は出土しなかった。

第417図　第24号柵列跡




SA24
1　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
4　暗褐色土　ローム粒子少量、ロームブロック、灰色ブロック多量含む。
5　暗褐色土　灰色粒子少量、ロームブロック多量含む。
6　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
7　明褐色土　ローム粒子少量含む。
8　黄褐色土　ロームブロック、ローム塊多量含む。

第418図　第25号柵列跡




ＳＡ２５
1　黒褐色土　　ローム粒子少量含む。
2　黒褐色土　　ローム粒子多量含む。
3　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
4　暗褐色土　　ローム粒子少量含む。
5　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
6　暗褐色土　　ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。
7　暗褐色土　　ロームブロック多量含む。
8　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。

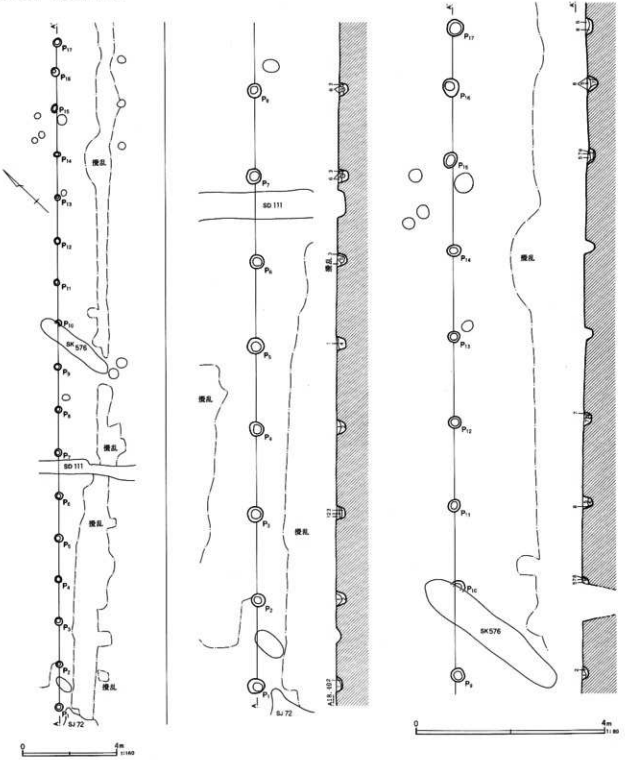
**第26号柵列跡（第419図）**

調査区の南西、Ｑ－３～Ｔ－６グリッドにかけて位置している。なお、中央部付近では縄文時代の土壙ＳＫ576と重複しているが、便宜上調査はＳＫ576を優先した。

掘形の平面形態はほぼ円形で、直径は約30cm、深さは20～30cmである。確認面からの掘り込みは浅く、断面はＵ字型になっているものが多かった。柱間は部分的やや狭くなったりする箇所があるが、基本的には約180cmの等間である。

覆土はローム粒子を多量含む灰褐色土を基本に構成され、部分的に炭化粒子が含まれる場合がある。また、覆土の灰褐色土は基本的にＳＡ22などと火山灰と考えられ、上層に集中している。柱痕跡や遺物は検出されなかった。

第419図　第26号柵列跡




ＳＡ２６
1　灰褐色土　　ローム粒子多量、白色粒子少量含む。
2　暗黄褐色土　ローム粒子、炭化粒子多量含む。
3　暗黄褐色土　ローム粒子多量、灰褐色粒子少量含む。
4　暗灰褐色土　ローム粒子、灰褐色粒子多量含む。
5　暗褐色土　　灰褐色粒子多量、白色粒子多量含む。
6　灰褐色土　　ローム粒子、白色粒子少量含む。
7　灰褐色土　　ロームブロック多量含む。
8　黄褐色土　　ロームブロック多量、灰褐色ブロック少量含む。

## 4．井戸

今次調査区において確認された中・近世の井戸は時期不詳のものを含めて64基である。この内、大半の井戸跡が近世段階のものと推測される。

井戸跡の分布傾向としては、調査区中央の緩斜面部に集中しており、調査区北側の低位段丘面や、調査区南部の上位段丘面での分布は少ない。他に井戸跡の立地で特徴的なことは、古墳の周溝内部に位置する井戸跡が20基を数えるということが挙げられる。特にＳＳ60の周溝内には15基の井戸跡が集中している。ＳＳ60は帆立貝形前方後円墳であり、墳丘内では中心に近いほど遺構を確認することができない。そのため、近世段階でもある程度の墳丘が残っていたものと推察される。

近世の掘立柱建物跡が集中している地域も井戸と同様の分布状況であり、ＳＳ60よりも南西側である。このことからＳＳ60の残存墳丘は、屋敷地であった初期の段階において、土地空間を利用する際の制約となっていたとがわかる。墳丘の高まりが建物を建てる際の制約であったことは想像に難くない。

また、墳丘の高まりが境界線の役割を担っていた可能性もあり、或いは墳丘の高まり自体が高台、物見台として利用されていたかもしれない。調査段階で墳丘は確認できなかったため、実際の用途は不明であるが、ＳＳ60の墳丘がある程度意識されて屋敷割りが行われたのは間違いなかろう。したがって、井戸も土地を利用するには制約があり、屋敷地の境界である墳丘の裾に掘られることが多かったのであろう。

他方、井戸を掘削する際の労力を考えれば強度なローム土を掘削するよりも埋没した周溝内部を掘る方が労力の削減となったであろうことも、周溝に井戸が集中する理由のひとつに挙げられよう。

本遺跡の井戸跡は、調査開始の段階で既に大半の井戸跡が削平によって上部構造を失っている可能性が高い。確認面での標高が一番高かった井戸跡は第63号井戸で18.90m、低かった井戸跡は第98号井戸で15.50mであった。また、すべての井戸を完掘できたわけではないが、最深の井戸は第112号井戸で、底面の標高は12.30mであった。いずれの井戸も掘削中から地下水の湧水があり、井戸としての機能を果たすことができたのは間違いない。

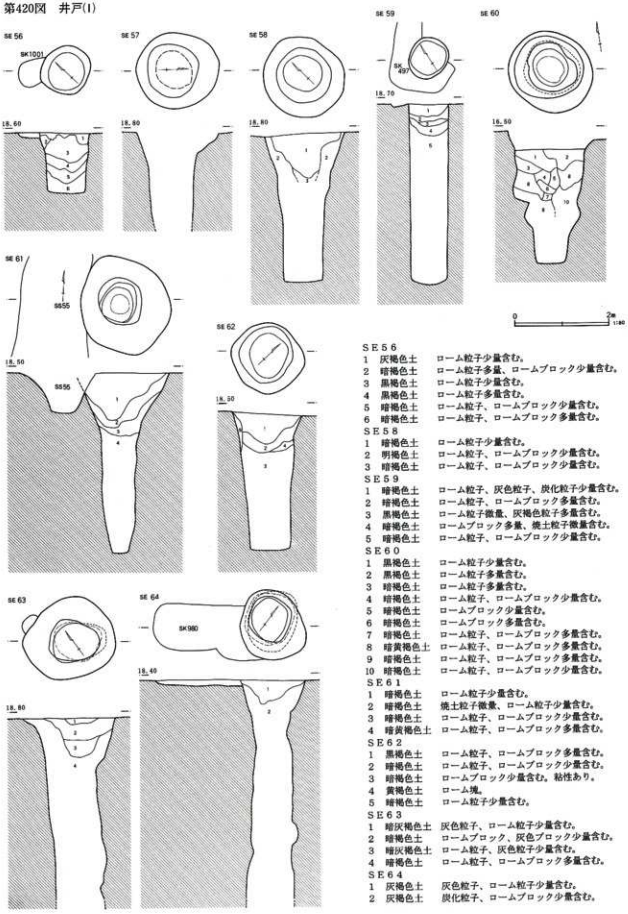
井戸はすべて素堀の井戸であり、上屋構造を示すような遺構、および井桁などの設備が明確に確認できるものはなかった。但し、内部壁面に加工痕のある井戸が何基かあり、形態から二種類に区分することができた。

まず第一に第61・62号・67号・68号・69号・70号・78号・80号井戸跡（以上写真参照）で見られた井戸の壁面中位あるいは下部に足掛け状の小穴、もしくは柱穴状の穴が開くものである。第二に第79号・83号井戸（以上写真参照）で見られた壁面上部から底部にかけて縦に一本、柱穴状の堀り込みがあるものである。これらの加工痕が何の目的のために用いられたかは今後の課題と言わざるおえないが、井戸掘削時あるいは清掃時の足掛け穴、もしくは水を汲む際に用いられた柱穴などの用途が考えられる。

井戸跡から出土した近世の遺物は、17世紀末から18世紀前半を中心とするものが多い。この時期は、『新編武蔵国風土記稿』に鴻巣御殿に関連した「御鷹部屋」があったという記載とは時期が異なっている。このことは、元禄四年（1691）の鴻巣御殿廃棄後にも当地域にある種の設備が残っていたことを暗示していよう。また、時期が近いと思われる井戸が一箇所に集中して掘られているということは、井戸自体が飲料水用や消火防水用の水溜桶などのような用途を異にしていたか、１基の井戸あたりの使用期間が短かったことが考えられる。しかし、井戸の分布状況を見ると明確な計画性は認められず、近世だけで109基もの井戸が集中する理由は定かではない。

尚、井戸埋め戻しの際には井戸神信仰の関係から竹などを差す風習があったということが知られている

第420図　井戸(1)




SE56
1　灰褐色土　　ローム粒子少量含む。
2　暗褐色土　　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
3　黒褐色土　　ローム粒子少量含む。
4　黒褐色土　　ローム粒子多量含む。
5　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
6　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック多量含む。

SE58
1　暗褐色土　　ローム粒子少量含む。
2　明褐色土　　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
3　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック少量含む。

SE59
1　暗褐色土　　ローム粒子、灰色粒子、炭化粒子少量含む。
2　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
3　黒褐色土　　ローム粒子微量、灰褐色粒子多量含む。
4　暗褐色土　　ロームブロック多量、焼土粒子微量含む。
5　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック少量含む。

SE60
1　黒褐色土　　ローム粒子少量含む。
2　黒褐色土　　ローム粒子多量含む。
3　暗褐色土　　ローム粒子多量含む。
4　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
5　暗褐色土　　ロームブロック少量含む。
6　暗褐色土　　ロームブロック多量含む。
7　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
8　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
9　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
10　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック少量含む。

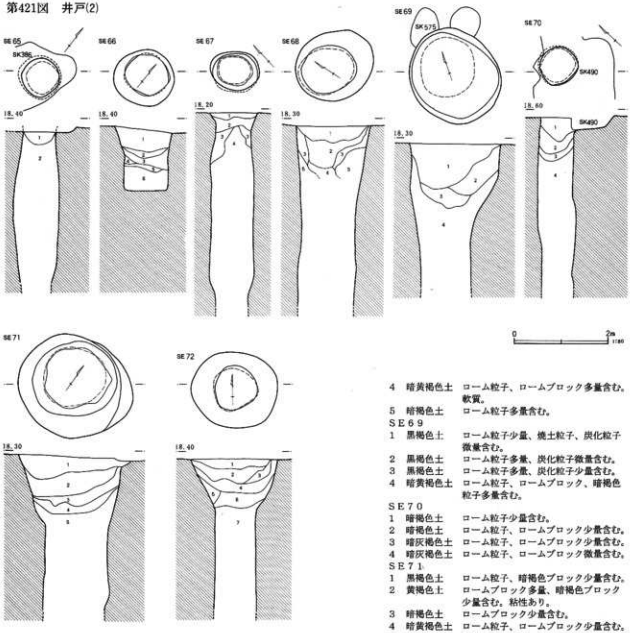
SE61
1　暗褐色土　　ローム粒子少量含む。
2　暗褐色土　　焼土粒子微量、ローム粒子少量含む。
3　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
4　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。

SE62
1　黒褐色土　　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
2　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
3　暗褐色土　　ロームブロック少量含む。粘性あり。
4　黄褐色土　　ローム塊。
5　暗褐色土　　ローム粒子少量含む。

SE63
1　暗灰褐色土　灰色粒子、ローム粒子少量含む。
2　暗褐色土　　ロームブロック、灰色ブロック少量含む。
3　暗灰褐色土　ローム粒子、灰色粒子少量含む。
4　暗褐色土　　ローム粒子、ロームブロック多量含む。

SE64
1　灰褐色土　　灰色粒子、ローム粒子少量含む。
2　灰褐色土　　炭化粒子、ロームブロック少量含む。

第421図　井戸(2)




SE65
1　灰褐色土　白色粒子微量含む。
2　灰褐色土　ローム粒子微量含む。
SE66
1　黒褐色土　ロームブロック少量含む。
2　明褐色土　ロームブロック少量含む。
3　明褐色土　ロームブロック多量含む。
4　明褐色土　ロームブロック微量含む。
5　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
6　褐色土　ロームブロック少量含む。
SE67
1　暗灰褐色土　灰色粒子、ローム粒子、炭化粒子少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、灰色粒子微量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
4　黒褐色土　ローム粒子微量含む。
SE68
1　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。軟質。
4　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。軟質。
5　暗褐色土　ローム粒子多量含む。
SE69
1　黒褐色土　ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量含む。
2　黒褐色土　ローム粒子多量、炭化粒子微量含む。
3　黒褐色土　ローム粒子多量、炭化粒子少量含む。
4　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック、暗褐色粒子多量含む。
SE70
1　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
3　暗灰褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
4　暗灰褐色土　ローム粒子、ロームブロック微量含む。
SE71
1　黒褐色土　ローム粒子、暗褐色ブロック少量含む。
2　黄褐色土　ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。粘性あり。
3　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
4　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。粘性あり。
5　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
SE72
1　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
2　黄褐色土　ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。粘性あり。
3　黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。粘性あり。
4　暗黄褐色土　ローム粒子多量、ロームブロック、暗褐色ブロック少量含む。粘性あり。
5　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
6　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック少量含む。
7　黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。粘性あり。
SE73
1　黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。粘性あり。
2　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
3　黒褐色土　ローム粒子微量含む。
4　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック多量含む。
5　暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
6　暗灰褐色土　ロームブロック少量含む。粘性あり。
7　暗灰褐色土　ロームブロック多量含む。粘性あり。